

木次原遺跡

2003.3

北相木村教育委員会

KITSUGIHARA SITE

木次原遺跡

2003.3

北相木村教育委員会

はじめに

北相木村は長野県の東端に位置し、群馬県上野村に接しております。村内原始古代の遺跡としては、村の西側に位置する栃原岩陰遺跡が有名ですが、ここに報告する木次原遺跡は村内最東の遺跡で、群馬側に抜けるぶどう峠の登り口に位置しております。

この木次原地籍付近は、古くから遺物の採集出来る場所とされており、昭和55年の村内遺跡詳細分布調査でも当然遺跡地として登録されております。その後、昭和62年の小規模な土地造成の際、工事の断面に遺構と思われるものが露出していたことが認識されました。しかし本格的な発掘調査は行われておらず、これが如何なる時代に属し、どのような性格を有するものであるかは、不明のままでした。

ここに報告する内容は、平成10年から13年度に実施した上記の遺構の確認調査と、これに伴い行った試掘調査の成果であります。結果的には奈良・平安時代の住居址1軒、縄文時代前期初頭の住居址1軒と、おそらくこれと同時期の土坑1基が検出され、それぞれで遺存物や遺物の調査研究を行いました。

さらに発掘調査、整理作業の過程では、多くの村民の方の力を得ることが出来たこと、そして奈良・平安時代の住居址の断面パネルや出土遺物を、村レジャー施設「長者の森」の「森林交流センター」に展示し、多くの方の目に触れるように出来たことも、大きな成果と考えます。

また調査に際し、土地所有者の故田村四郎吉氏、田村馨氏には、常に御理解と御協力をいただきましたこと、あらためてここに御礼申し上げます。

この報告書が、多くの方のお役に立つことを切に願います。

平成15年3月

北相木村教育委員会

例 言

1. 本書は長野県南佐久郡北相木村木次原に位置する木次原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は北相木村教育委員会が行い、同教育委員会学芸員藤森英二が担当した。
3. 発掘調査・基礎整理作業を平成10年度～13年度まで行い、報告書作成作業を14年度に行った。
4. 本書の執筆はⅣ－4・Ⅴを除き藤森英二が行った。
5. 調査及び報告書作成にあたり、次の諸氏並びに関係機関より御協力・御指導を賜った。記して心より感謝の意を表したい。(敬称略)
井出正義・小山岳夫・小川直裕・熊井久雄・白沢勝彦・齋藤達也・田中浩江・堤 隆・野口 淳・馬場伸一郎・利渉幾多郎・長野県立歴史館保存処理室・株式会社バリノサーヴェイ
6. 発掘調査参加者(敬称略)
井出勝美・井出智子・木次正紀・大橋里奈・小口英一郎・岩泉辰子・小宮山千穂・篠田和久・篠田典子・中島 透・馬場伸一郎・藤森絵美子・峰尾勝巳・峰尾伸子・山口千正・横山 真
7. 整理作業参加者(敬称略)
安藤智子・糸永紀美子・岩泉辰子・小林ライ子・佐々木認・齋藤百子・篠田和久・篠田典子・高橋直美・中島 透・中島 恵・野口 淳・藤森絵美子・兵藤真紀・峰尾勝巳・峰尾伸子・横山 真
8. 引用・参考文献はⅣ－4及びⅤを除き、Ⅵの文末に挙げた。

凡 例

・挿図の縮尺

遺 構 1 : 50

土 器 拓本 1 : 2

石 器 小型石器 2 : 3 大型石器 1 : 3

・土器の胎土に繊維を含むものは断面に黒丸を付した。

・石器実測図中の空白面は節理面を示している。

・遺構セクション図の標高は図中に記した。

・遺物写真の縮尺は挿図と同一である。

・遺構写真の縮尺は統一されていない。

なお、本報告書に掲載したものを含め、遺物の一部は村レジャー施設「長者屋の森」に展示し、その他については北相木村考古博物館にて収蔵している。広く活用されることを望む。

目 次

はじめに

例 言

凡 例

目 次

| | | |
|------|------------------------------|----|
| I | 木次原遺跡について | 1 |
| II | 調査までの経緯と経過 | 3 |
| III | 層 序 | 4 |
| IV | 遺構と遺物 | 5 |
| IV-1 | 1号住居址 | 5 |
| IV-2 | 2号住居址 | 7 |
| IV-3 | 1号土坑 | 22 |
| IV-4 | 木次原遺跡から出土した炭化材の年代と樹種 | 23 |
| IV-5 | 1号住居址断面の保存処理について | 26 |
| V | 考 察 | 27 |
| | 木次原遺跡2号住居址より見る縄文前期の石器製作過程の復元 | 27 |
| VI | ま と め | 31 |

付 表：遺物観察表

写真図版

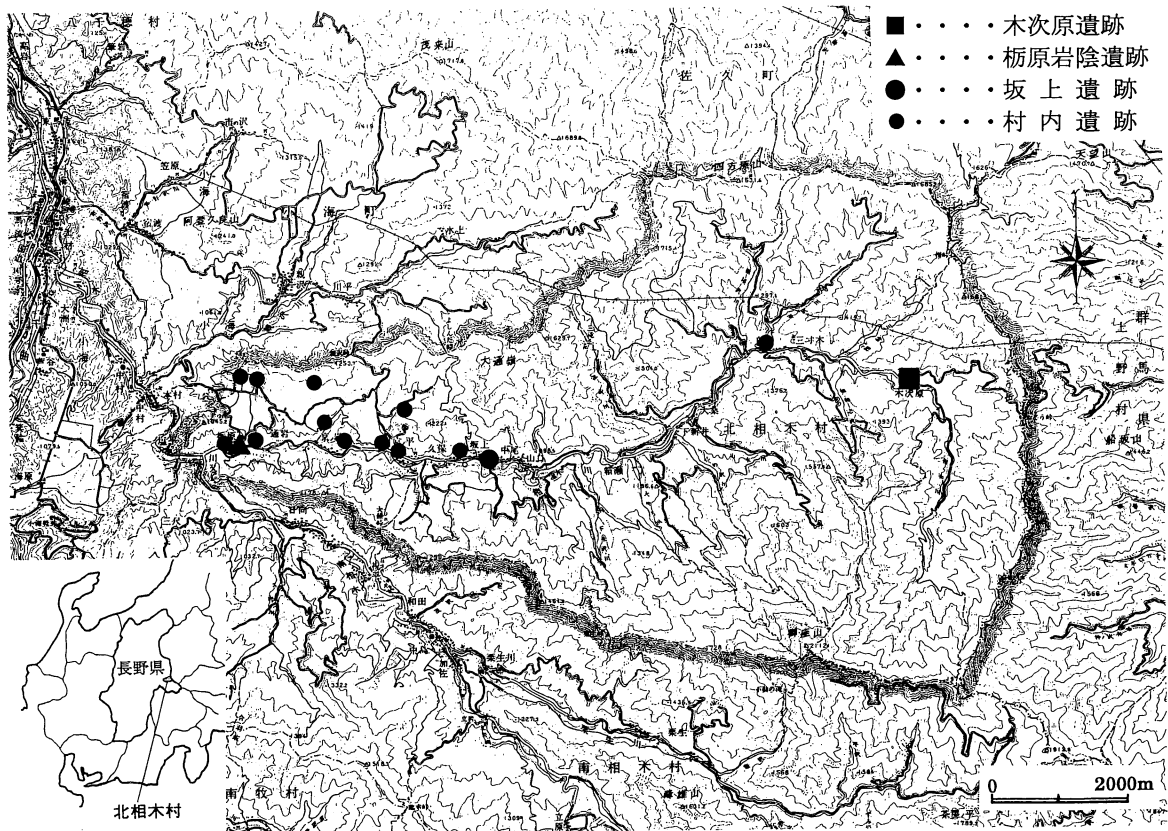
報告書抄録

Ⅰ 木次原遺跡について

佐久を南北に貫く国道141号線をJ R小海線小海駅付近で東に折れ、県道上野小海線を行く。千曲川の支流相木川を沿うように登るこの道は、その途中に有名な栃原岩陰遺跡があり、やがて標高約1500mのぶどう峠を越えて群馬県上野村に行き着く。木次原遺跡は、すでに群馬側にほど近いこの峠道の袂、標高1200mの高冷地に位置する（第1図）。相木川の右岸で、現在は畑とカラマツの植林地となっており、西南に緩やかに傾斜する日当たりの良い場所である。

この木次原の位置する北相木村は面積56.26km²で、千曲川の支流の一つである相木川をつくる谷を中心とした山村である。東側の群馬県との県境は利根川水系との分水嶺でもある。村のほぼ中央を流れる相木川は、村内の最高峰標高2,112mの御座山付近を源としており、源流から中流域は、地質的に関東山地に含まれる古生代から中生代の硬いチャート層を削りながら、全体としては緩やかに流れつつ、美しく変化に富んだ景観を生んでいる。

標高約900m付近から下流では、堆積した八ヶ岳火山起源の千曲川泥流が川沿いを中心に露出しているが、蛇行する相木川の流れはこの泥流を穿ち、いくつかの岩陰（ノッチ）を形成している。相木川流域のうち南相木川と合流する間にも、両岸に約200個の岩陰が確認されており（利渉 2001）、有名な栃原岩陰遺跡はこの岩陰群に属する。栃原岩陰遺跡は複数の岩陰からなるが、これらの岩陰では縄文時代草創期末から弥生時代、古代・中世・近世の遺物が出土しており（北相木村教育委員会 2002）、その他にも中世の



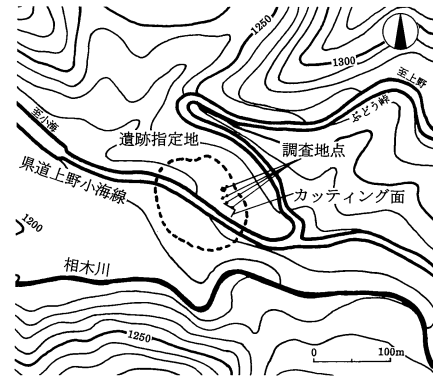
第1図 木次原遺跡位置図

板碑が出土した岩陰（京ノ岩岩陰）も存在する。さらにこれらの岩陰は現在でも物置や信仰の場として利用され続けており、村の歴史を語るのに欠かせないものである。

一方で川は堆積土を削りながら流れ、村内の各所に幾つかの河岸段丘を造っている。この段丘は大きく3段に分けられるが、川の流れは複雑に谷を形成し、全ての面がどの場所でも確認できるわけではない。しかしこの作用により、比較的広い平坦な地形が造られている箇所もあり、中でも標高約990～1020mの坂上地籍付近では川淵は数十mの断崖となるものの、その上部では複数の段丘が緩やかな傾斜地を形作っており、縄文、平安、中世（山城）の複合遺跡である坂上遺跡（北相木村教育委員会 1999）が存在する。その下流にもやはり段丘状の平坦面に宮ノ平遺跡などが並ぶ。

これらの遺跡付近は、現在も人家や田畑の多い場所であるが、木次原遺跡はこれらより上流に位置し、現在の集落からははずれている。しかしかつて上州（群馬県）との交流が盛んだったころは信州側（長野県）の玄関口であったとも言う。

この木次原遺跡では昭和55年の村内遺跡詳細分布調査でも縄文時代の遺物が採取されており、県道上野小海線を含んだ形で遺跡指定されている。その後昭和62年の東京電力の鉄塔工事に伴う作業小屋建設時（その後作業小屋は平成2年まで存在）の小規模な造成工事において、土を削った際に出来たカッティング面に、時期は不明確ながらもローム層中まで掘り込みのある遺構の断面が見えることが、分布調査にも参加した井出正義氏らによって確認された。しかし詳細な調査の手が及ぶことはなく、遺構の時期や性格も不明確なまま時を刻んでいた。



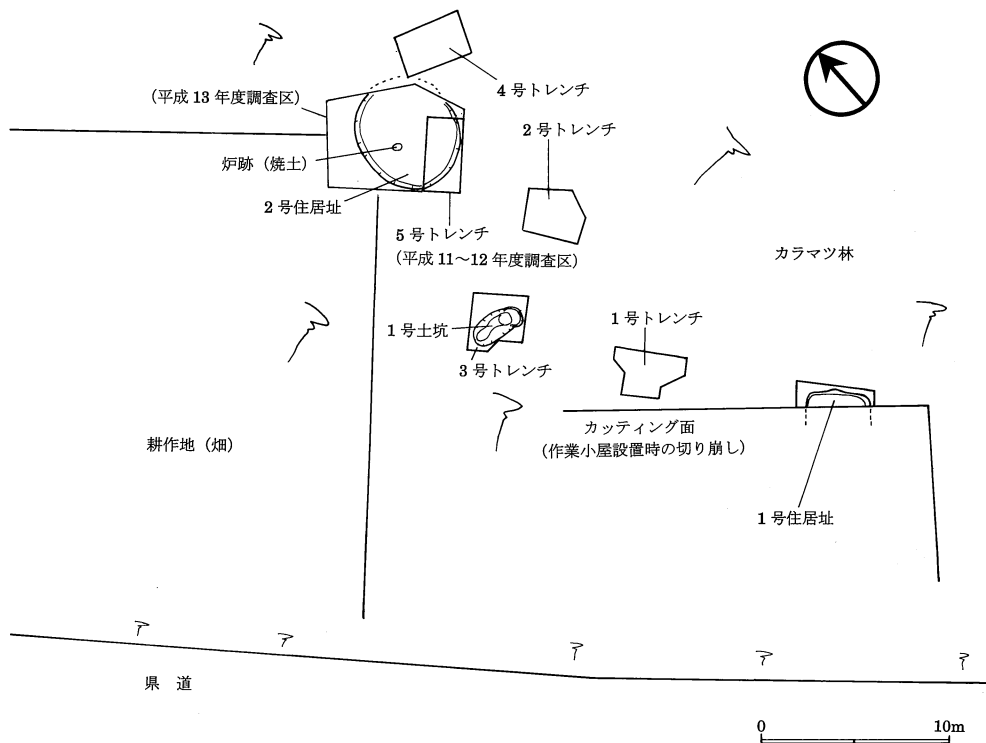
第2図 木次原遺跡地形図（1：10000）

II 調査までの経緯と経過

そもそも本調査のきっかけは、先に記したように昭和62年以降露出していた遺構と思われるものの断面が、当時北相木村教育長を務めていた山口英臣の目に留まっていたことであった。山口はこの箇所の調査と保存公開を画策していたが、平成9年の村長就任後、北相木村教育委員会事務局にこの計画を持ちかけた。その後北相木村教育委員会、北相木村文化財保護委員会でもこれを受け入れ、村単独事業として発掘調査を行う運びとなった。

以下年度ごとに調査の内容を列挙しておく。

- 平成10年度
- ・カッティング面に露出していた掘り込みの断面確認
 - ・上記掘り込みのプラン確認と一部掘り下げを行い、1号住居址と認定
 - ・多量の炭化物検出と土師器2点が出土
- 平成11年度
- ・1号住居址西側のカッティング面で断面サンプル作成
 - ・1号住居址北側掘り下げ、完掘
 - ・1号住居址断面剥ぎ取り
 - ・1～5号トレンチの設定と掘り下げ（ローム上面まで）
- 平成12年度
- ・3号トレンチ内、1号土坑完掘
 - ・5号トレンチ拡張。円形プランを2号住居址と認定
 - ・遺物整理作業（土器拓本、石器実測、石器接合）
 - ・1号住居址断面剥ぎ取りパネル作成

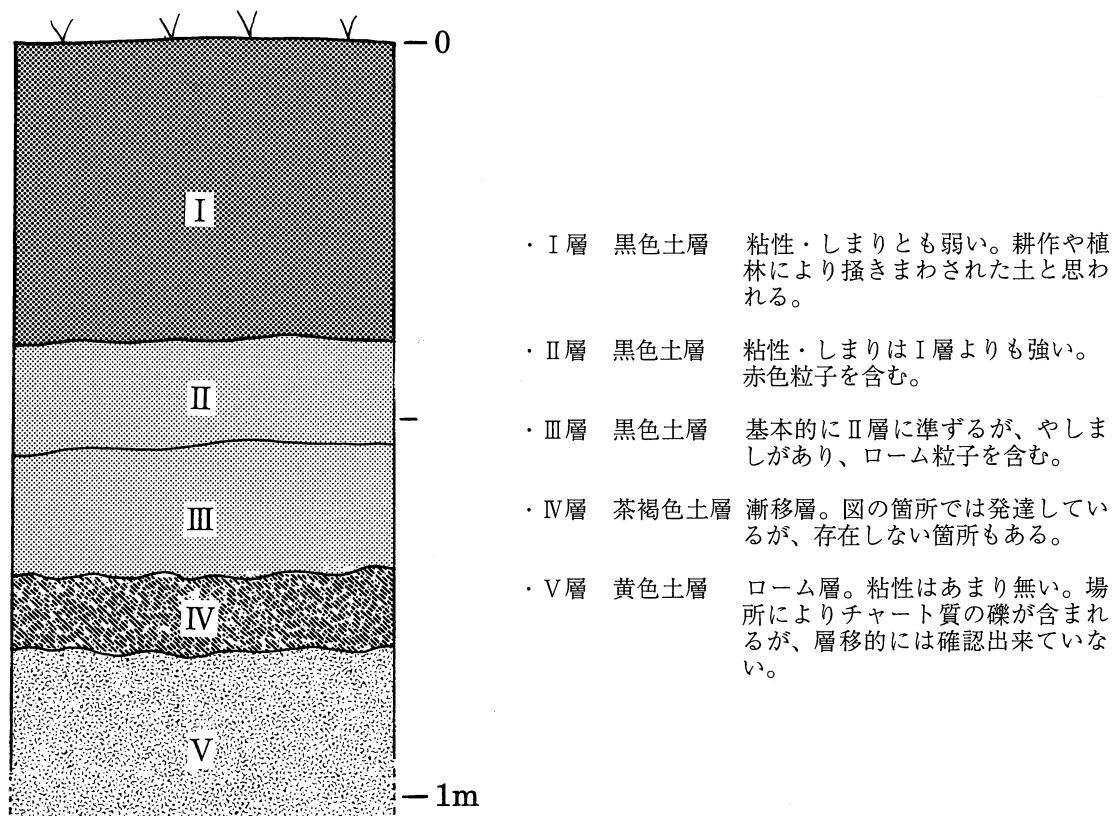


第3図 調査区平面図 (1:400)

- 平成13年度
- ・ 2号住居址完掘。野外調査終了
 - ・ 遺物整理作業（土器拓本、石器実測、石器接合）
- 平成14年度
- ・ 遺物整理作業、報告書の作成
 - ・ 長者の森に遺物等を展示
 - ・ 遺跡現地に標柱及び説明板を設置

Ⅲ 層 序

基本層序を示す第4図は4号トレンチ内のものである。遺跡内では山側の斜面に近付くにつれ、Ⅰ～Ⅲの黒色土が厚くなる傾向があるようで、1号住居址付近では黒色土層はわずか10cmほどであるなど、地点により変化が大きい。これは自然地形にもよろうが、耕作や植林されたカラマツの根による攪乱、または小規模な削平のあった箇所もあるものと思われる。また、Ⅴ層：ローム層も地点により変化が認められ、1号住居址断面を含むカッティング面では、ローム層中にチャート質で人頭大の礫が多量に含まれていた（後に記すように1号土坑の底でも見られた）。このような箇所では赤色や白黄色の粒子が多く含まれ、やや粘性も強い傾向がある。なお、精査した1号住居址断面ではⅣ層：漸移層も全く見られず、削平があったと考えられるが、他の地点でも礫を含むローム層を層位的に確認することは出来なかった。



第4図 基本土層図（1：10）

IV 遺構と遺物

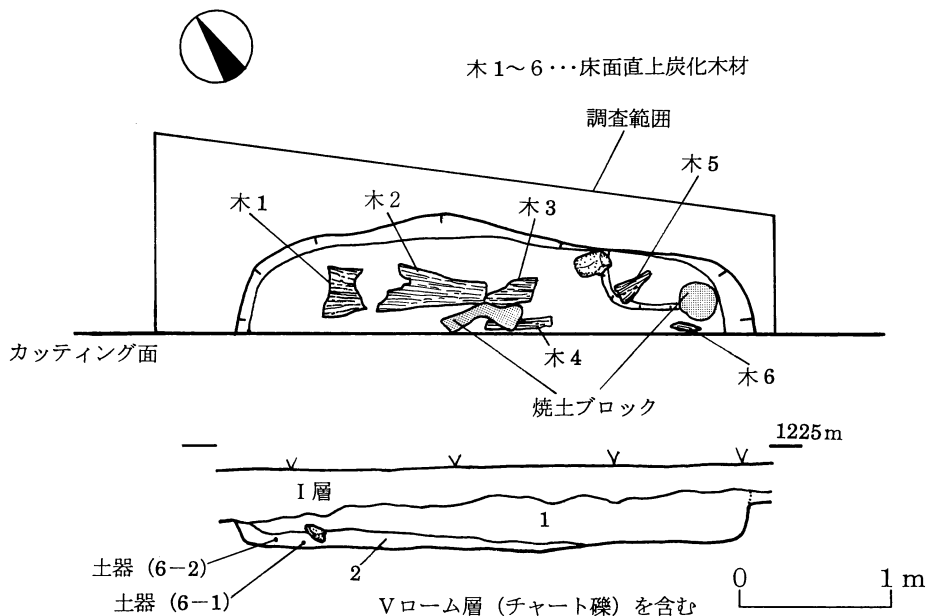
IV-1 1号住居址

遺構

先に記したように、本調査のきっかけとなった遺構であるが、昭和62年の作業小屋設置以降認識されつつも、その後特に何らかの措置が取られていたわけではなく、調査に入ったときは既に断面の観察も難しい状況であった。

平成10年度の調査では、まずこの断面の精査を行った。その結果、約25cmほぼ垂直にローム層中にまで掘り込んだラインと、330cmに及ぶ平面の床面ラインが確認出来た。さらに精査中にも多量の炭化物と土師器片2点が出土したことなどから、古代の遺構と判断した。次に断面剥ぎ取り用のベルトを残しつつ、ローム層上面までの土を取り除き遺構のプラン確認を行った。その結果断面に対応したかたちで、長軸345cm、のプランを見出した。南西側は破壊されていたが、角丸方形の遺構の一部と判断し、奈良・平安時代の竪穴住居址として、1号住居址と名付けた。しかしこの後、予定していた断面剥ぎ取りの準備がつかず、これ以降の調査・作業は翌平成11年度に持ち越すこととなった。尚断面の剥ぎ取り作業についてはIV-5に記載している。

平成11年度の断面の剥ぎ取り終了後、遺構北東側の覆土を取り除く作業に入ったが、覆土中には大小の炭化物が含まれており、床面には6つの炭化材が残されていた。これらは板状で、床面に張り付くように並んでいた。また焼土ブロックがほぼ同じレベルに見られた。この内木2、木5、木6をサンプルとし年



- 1…黒褐色土層。ローム粒子が多く、炭化物を含む。部分的にやや黄色味が強い。
2…黒色土層。ローム粒子が多く、炭化物を多量に含む。遺物の土器2点は本層からの出土。

第5図 1号住居址平面及びセクション図 (1:50)



第6図 1号住居址出土土器（1：2）

代分析と樹種の鑑定を行った。分析の内容はIV-4に詳しく記すが、樹種はヒノキ科に含まれ、年代は1320BP~1220BPと判明した。実年代では西暦650~730年前後であるため、遺物との間に開きがあるが、不整合はない（IV-4参照）。ただしこの炭化材が住居の建築材料であったのか、あるいは別の目的で運び込まれていたものなのかは判断出来ていない。また、南東角には床面から10cmほどの浅い掘り込みがあった。

尚、第5図のセクション図は断面剥ぎ取り時に残したベルト部で、地表面からのものとなっている。後世の攪乱がほぼローム層にまで達していると思われるが、遺構東側ではローム上面が残されていた。しかし本来はそこにあるはずの遺構掘り込みライン（図中点線部）は、土質的には判別不能であった。

遺物

本遺構からは土師器の破片2点が出土した(第6図)。1は口縁部で8~9世紀代の小型甕と思われるが、口縁が「くの字」状に屈曲する8世紀前半の土師器長胴甕の破片とも思われ、さらに口縁が受け口状になるものとするとも9世紀後半ころにまで下る可能性もある。ただし小破片のため、ここでは断定しないでおきたい。2も土師器で甕の胴部の破片と思われる。なお両者とも断面精査時の覆土中（2層）からの出土であるが、床面から5cm程度浮いた状態であった。

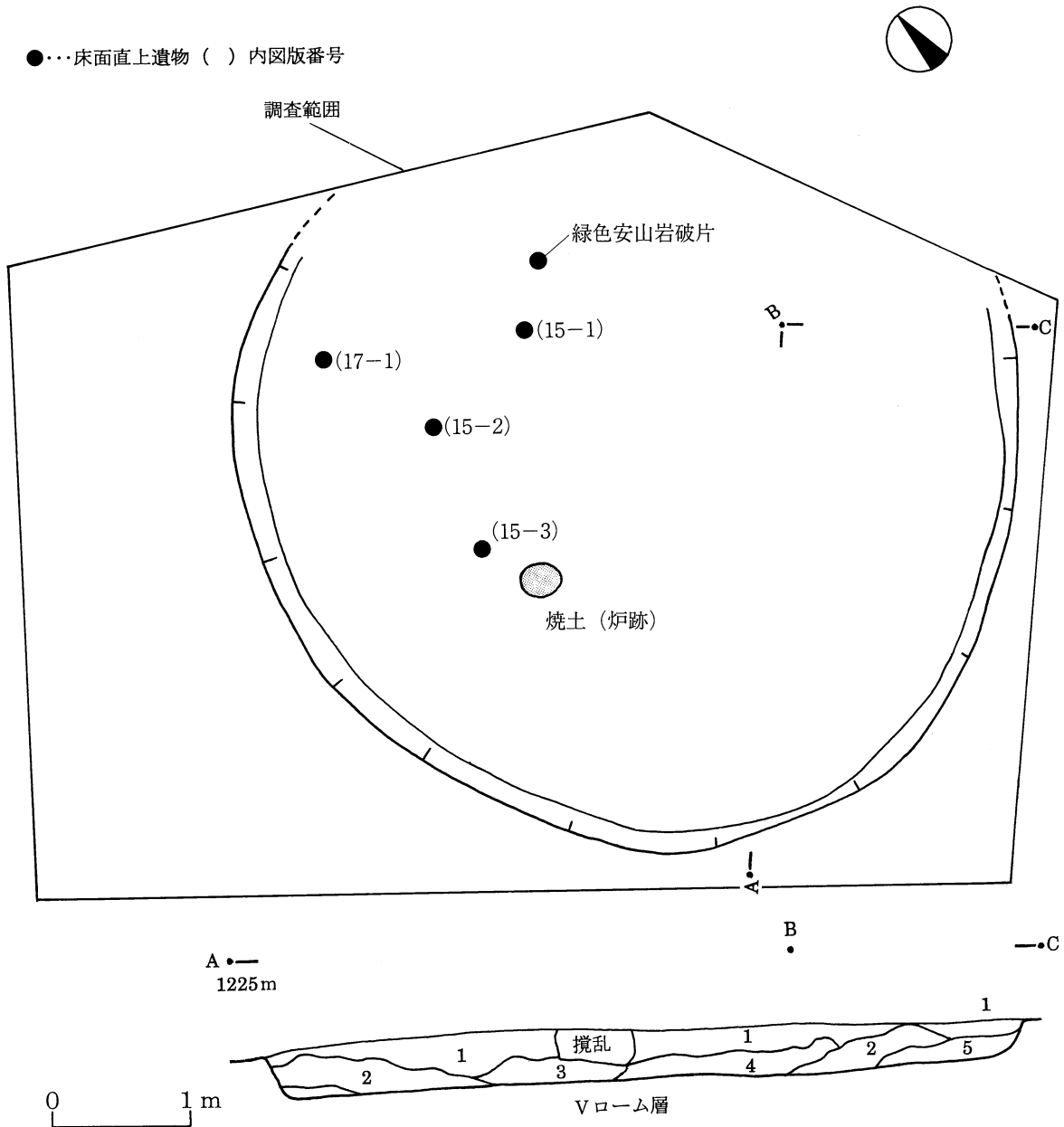
時期

出土した土器などから、8世紀から9世紀の遺構と思われる。

IV-2 2号住居址

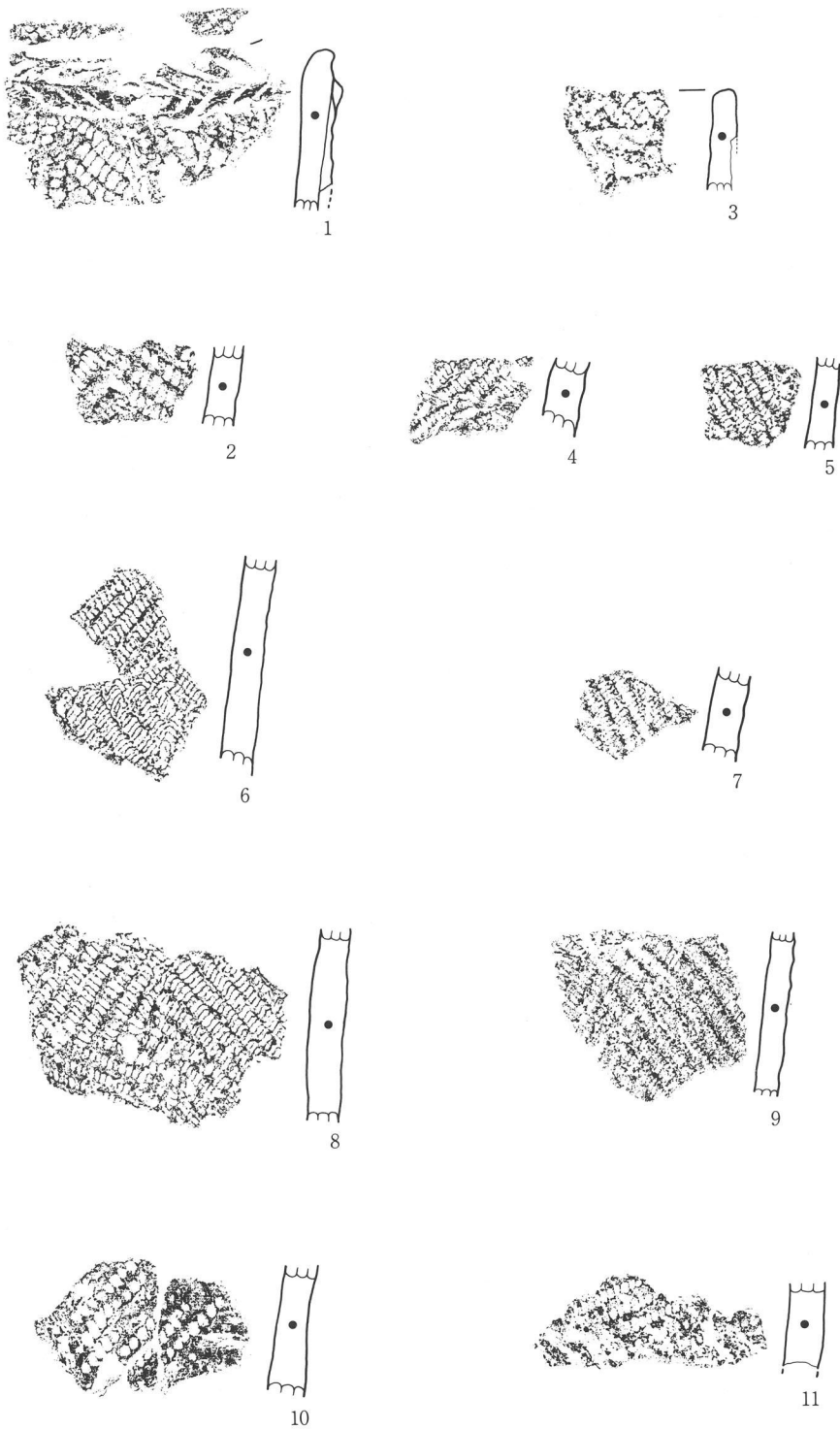
遺構

平成11年度の試掘溝である5号トレンチでは、すでに黒色土層（Ⅱ層）から他のトレンチではほとんど見られなかったチャートの小型剥片が多量に出土していた。平成12年度の調査でここを拡張しローム層上面まで掘り下げたところ、円形のプランの一部が見出され、住居址である可能性が高いと考えられた。平成13年度には予想される住居址の範囲に調査区を拡張し、ほぼ全集する長径600cm弱の不整円形のプランが確認出来、これを2号住居址として調査した。



- 1…黒色土層。基本層序のⅡ・Ⅲ層よりしまりがあり、赤色粒子を含む。遺物は最も多く含まれていた。
- 2…暗褐色土層。粘性、しまりともやや強く、ローム粒子やローム塊、径5mm未満の炭化物を含む。
- 3…褐色土層。2層より粘性が強い。ローム粒子が多く、径5mm前後の炭化物を含む。
- 4…暗褐色土層。2層に似るが、ローム塊はなく、径10mm未満の炭化物を多く含む。
- 5…黒色土層。粘性が強く、しまりもある。ローム粒子を含む。

第7図 2号住居址平面及びセクション図 (1:50)



(1 : 2)

第8图 2号住居址出土土器(1)

遺構確認面から床面までの深さは35～40cm。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。プラン内、その周辺とも柱穴は確認出来ていない。中央やや西寄りには不整形の焼土があったが、焼成は極めて弱く、2cm程の厚みしかなかった。

遺物

縄文時代前期初頭の土器片と、チャート製石器、緑色凝灰岩製石器等が出土している。特にチャート製石器の量は膨大である。

土器

土器は出土した破片全てが縄文時代前期初頭のものと思われる。大きくは胎土に繊維を含み縄文の施されたものと、薄手で無文のものに2分される。

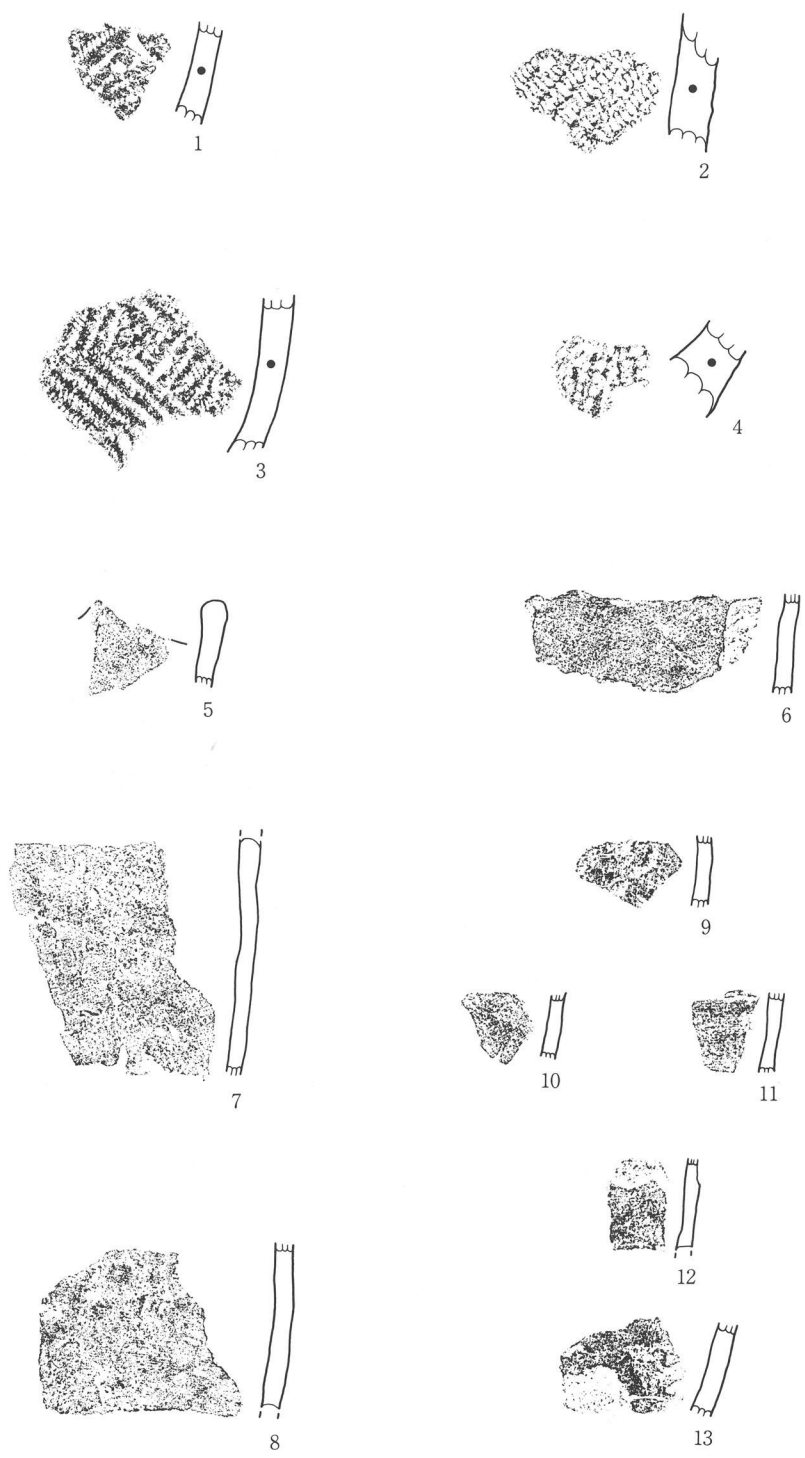
図示した第8図1～第9図4は羽状縄文系土器である。厚手で、胎土に多量の繊維や鉱物を含むものが多い。存知の型式に当てはめれば細分は可能かも知れないが、破片資料が多く、今後混乱をきたす恐れもあるため、ここでは特に細分せずに紹介する。

第8図1は口縁部で口唇部にも縄文が施される。口縁には横位の隆帯がめぐり、この隆帯上とその直上に方向の異なる沈線の施文がある。また破片のため不明確だが波状口縁を成す可能性もある。内面は比較的丁寧に調整されている。2はこれと同一個体と思われ、撚りの異なる原体で羽状縄文を構成している。3も口縁部破片であるが、口唇に施文は無い。下部の外表面は剥落している。4は外表面は明るい赤褐色であるが、内面（及び断面の多く）が黒色で、炭化物が付着している。5も同様で同一個体と考えられるが、そうであれば撚りの異なる原体で羽状縄文を構成していたこととなる。6は胎土に白色の粒子を多く含み、内面はかなり平らになるまで良く調整されている。外表面は撚りの異なる原体による羽状縄文である。7はこれと同一個体である。8は胎土に含まれる赤い鉱物が特徴的で、外表面には撚りの異なる原体で羽状縄文が施されている。内面には調整時に出来たであろう指頭の痕や、筋状の鉱物の移動痕が見られる。9は比較的薄手で繊維も少ないが、撚りの方向の異なる原体で羽状縄文が施されている。尚第8図1～9の土器は、全て0段多条の縄文原体を用いていると思われる。10は内外面とも指で挟んだかのような凹凸があり、外表面ではその上に縄文が施されている。11はこれと同一個体で、わずかに撚りの異なる原体による羽状縄文の構成が見て取れる。第9図1は湾曲から底部に近い部位の破片と思われるが、LRの縄文が施される。内面にはわずかだが炭化物が付着する。2は繊維、鉱物とも多く含まれ、撚りの異なる原体による羽状縄文が見られる。同下半部の破片と思われる。3は底部に近い位置の破片と思われるが、撚りの異なる原体による羽状縄文が施されている。4も底部付近の破片と思われるが、縄文の施文が見える。尚、第9図は4を除き0段多条の縄文原体を用いていると思われる。

総じて羽状縄文系土器の外表面施文は、0段多条の縄文原体を用いるものが多く、撚りの異なる原体を使って羽状を構成するものが多い。

第9図5～13は接合関係にはないが、全て同一個体と思われる土器片である。出土した全てが無文で、器面も薄い。胎土には鉱物を含むが、繊維は全く見られない。色調は黒褐色から薄茶褐色で、内面には指頭による調整の跡が見られる。6、12、13のように表面が剥落した資料も多い。5は口縁部で、突起状の部分であると思われる。13は湾曲から底部に近い部位の破片と思われる。

このように復元出来る個体は無くも数個体存在する羽状縄文系土器に対し、無繊維の南信（あるいは東海）系の土器が一個体のみ供伴しているという状況であり、在地の羽状縄文系土器の中に若干の無繊維土



(1 : 2)

第9图 2号住居址出土土器(2)

器が混じるという佐久地域での傾向に概ね一致している。

石 器

石器は膨大な量が出土している。中でもチャート製石器は微細な剥片まで含めると850点を越える。この膨大な数の石器全てについて観察を行ったが、節理面の露出が多く、明確な分類も難しいものが多かった。一応の組成は「第19図 2号住居址チャート石器組成グラフ」を参考にさせていただきたいが、1g以下の微細な剥片で半数を近くを占め、石鏃などの製品は非常に少ないものとなっている。

また整理作業の中で接合作業も行ったが、後に見るように画一的な製作工程が見出しづらいこと、チャートの性質により節理面が多く生じており人為的な剥離面のみでは接合関係が見出しづらいことなどから困難を極め、5例の接合に留まった。またその5例も明確に作業工程が復元できるようなものではなく、無作為のうちに破碎したものであるようにも思われた。

なお図中、石の節理面が露出している箇所は空白としている。この中には石材として持ち込まれた時点で既に露出していた面以外にも、人為的な打撃で節理した面も含まれる。両者は周辺の剥離の様子や切り合いなどから理論上区別がつく場合もあるが、実際は判断不能の場合が多く、図上では全て空白で示している。

第10図1～6は石鏃の完成品である。1は大型で欠損も無い。2も大型であるがわずかに欠損している。3は1、2と比べやや小型であるが、先端が鋭角で、茎が無く基部がわずかに内曲するという形状は一致している。4、5、6は一部欠損品しているが1～3よりも基部の内曲がやや大きい形状と言える。但し6は側面の加工もやや大雑把な印象を受け、あるいは未製品かも知れない。なおこれらは二次加工がほぼ前面に及んでいるため、その素材は断定出来ない

第10図7～11は石鏃の未製品と思われる。9、10、11はまだ二次加工が少なく素材の剥離面が大きく残っている。いずれも折れや節理などにより製作途中で放棄したのではないか。なお7及び9と11は茶色い色調で、本遺構出土のチャートでは数少なく、同一母岩から剥離された可能性もある。

第11図1～3は石錐である。3はやや厚みのある縦長の剥片を素材にしているが、1、2は横長剥片が素材と考えられる。いずれも先端部は欠損していると思われる。

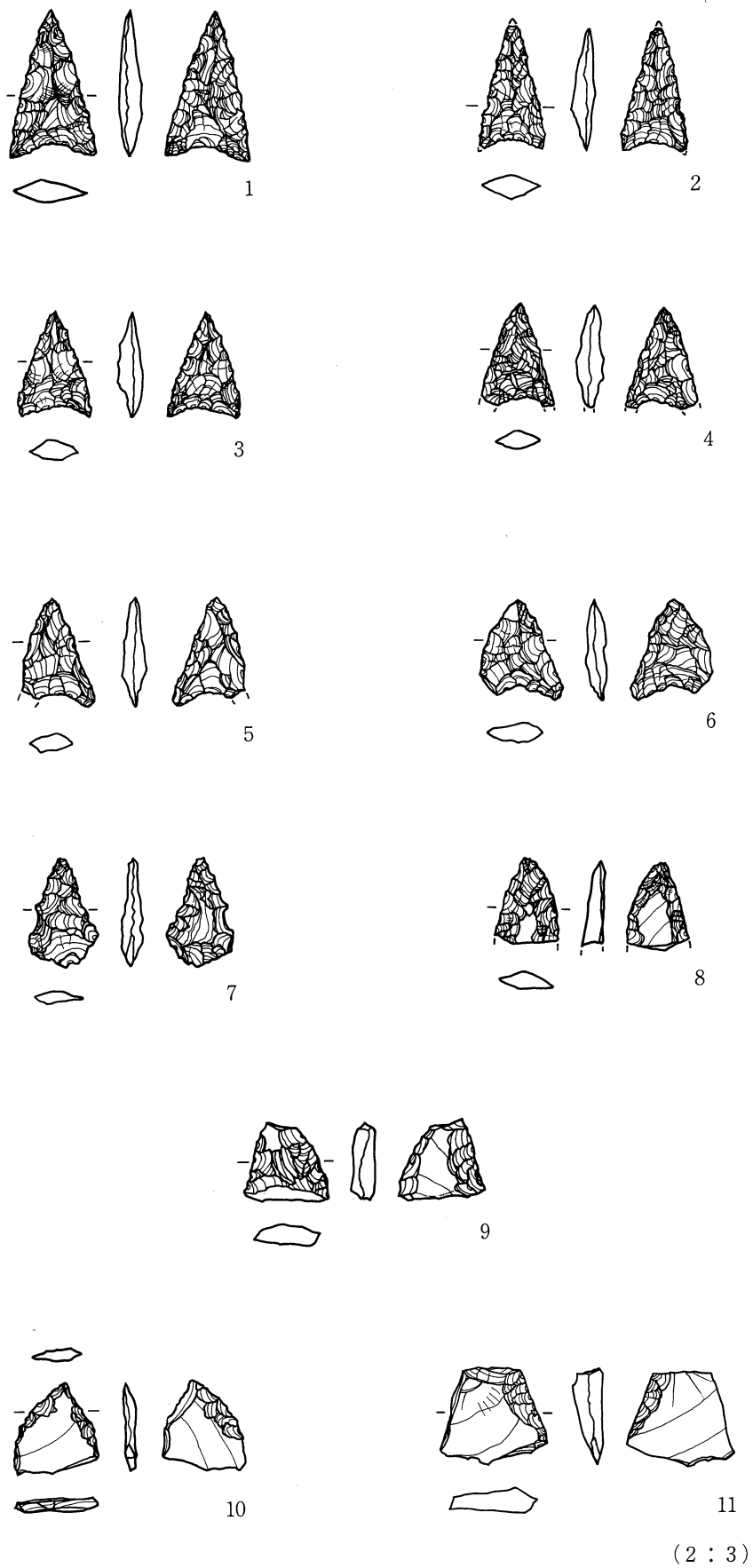
第11図4は鉄石英(赤玉石)製の横長の石匙である。表面には自然面を、裏面には主要剥離面を残す。深い赤色と相まって、本遺構出土の石器の中でも一際目立つ。赤い鉄石英は群馬県西部に見られ、峠越しの石材移動も視野に入れる必要がある。

第11図5～8は両極打法が見て取れる石器である。5は実際に楔として用いられていたかも知れない。6は両極打法により生じた剥片、7、8はその結果による残核で、剥片を得る段階でも両極打法が用いられていたと考えられる資料である。

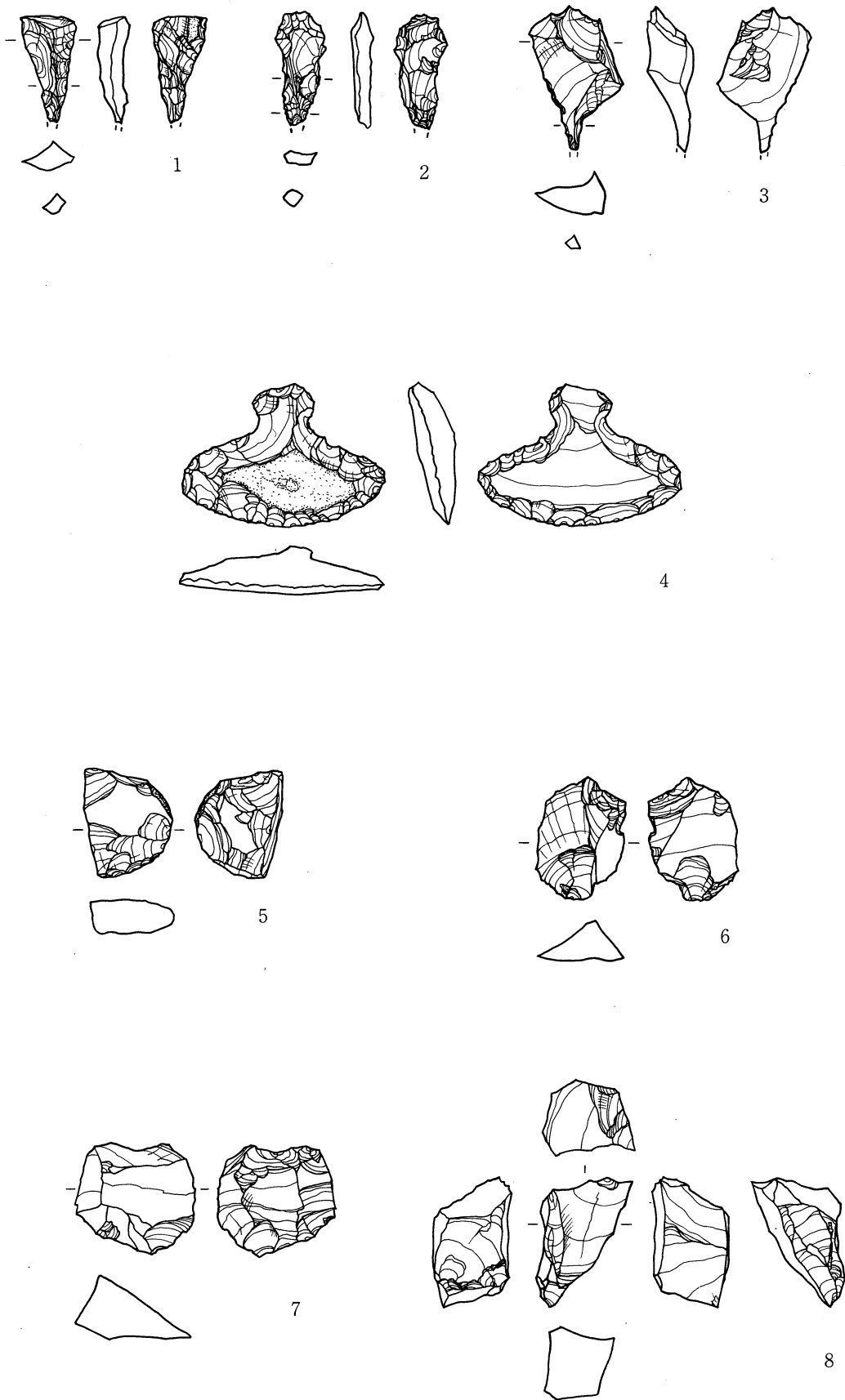
第12図には剥片類を集めた。1、2は縦長の剥片で何れも裏面は主要剥離面が残るが、母岩に対し1は多方向から、2は同一方向から連続的に剥片剥離が行われていたことを示すと見られる。

第12図3は平坦な面を打面にしており、おそらく連続的に剥ぎ取られた剥片と思われる。比較的幅広の剥片と言える。

第12図4はやや大型の剥片で、厚みを持つ。側面は自然面が残る。5もやや大型の幅の広い剥片で、主要剥離面が良く残っている。このように大型で連続的に剥離されたような剥片類は本遺構では極めて少ない。石器素材としての利用が主な原因と考えられるが、良質の大型剥片を得ることの困難さを示しているのかも知れない。



第10图 2号住居址出土石器(1)



(2:3)

第11图 2号住居址出土石器(2)

第12図6、7、8は両面がポジティブ面で、断面がレンズ状をなしている。尚このような剥片と、3～5のような幅広剥片は石鏃の素材に適しているように思われる。

第12図9、10は横長の剥片で、どちらも同一方向の打撃によりに母岩から連続的に剥離された資料と思われる。第11図1、2などの石鏃の素材として適していたのではないだろうか。

第13図1～4は、剥片剥離作業の比較的初期の段階で生じたと思われるやや大型の剥片類である。1は自然面を多く残し、打面も自然面である。2は節理面が多く解釈に苦しむが、上面及び下面との切り合いから、表面の節理面はすでに露出していた面（自然面と同じ意味合い）、裏面は上方向からの人為的な打撃により節理に沿って割れた面と思われる。3は表面は節理に沿ったと思われる割れ面が多いが、裏面は明らかな打撃により剥離された痕跡が残っている。4もやはり自然面を多く残す大型の剥片であるが、ここからさらに石器の素材となる剥片を得ようと、多方向から打撃を加えている。尚2、4は両極打法により剥離されたとも思われる。

第14図には残核を図示した。何れも平坦な剥離面（もしくは剥離により生じた節理面）を打面として、結果的に縦断面が逆三角形の残核となっている。3は1、2より遙かに大型で、ほとんどの面が節理面で、作業の復元は難しい。あるいはこの節理面は原石の入手の段階で既に露出していたものかも知れない。いずれにしろ石器石材には適さず、大型のまま破棄されたのではないだろうか。

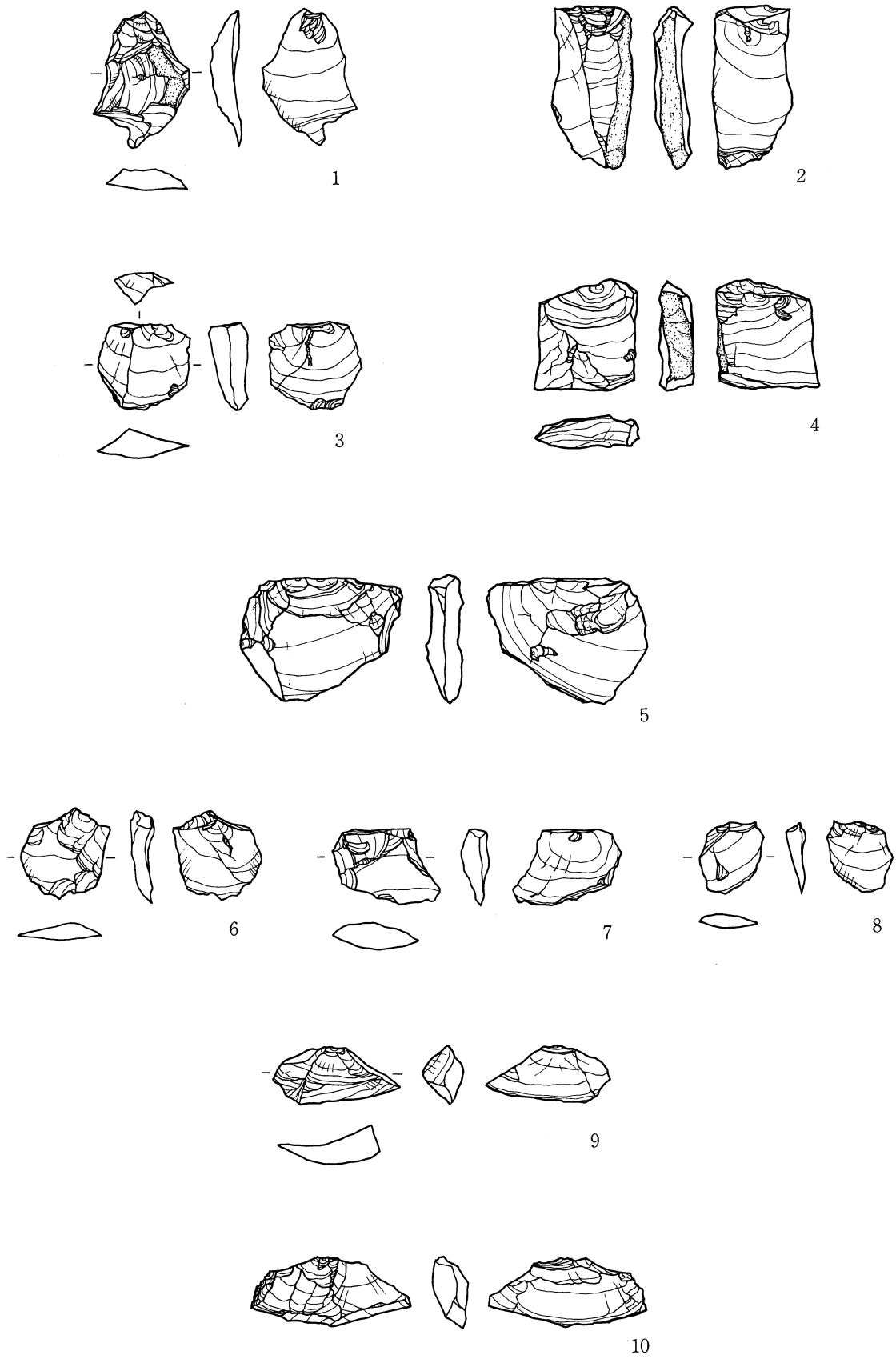
また床面直上からは、より大型のチャートが出土している。第15図1～3がそれで、特に3は大型で重さ6kg近くになる。一部に剥離面も見られるが、節理面での破碎が多く、その節理面も人為的なものなのか、あるいは原石として入手した段階で既に露出していたものなのか判断はつかない。いずれにせよこれらの資料からは石器製作工程の復元は難しい。またこれが石器製作に適さないため大型のまま残されたのか、あるいは後に破碎し利用する予定だったのか予測は難しいが、本遺構から最も多量に出土している黒色に近いチャートや、製品の一部に認められる青もしくは白味の強い灰色のチャートとは色調が異なっているものが多い。

緑色凝灰岩製の石器は大きさ形状ともに一定していない。図示した以外にも44点の剥片が出土している。第16図1は表面に自然面を多く残した縦長の剥片が素材で、左側縁には片面から、右側縁には両面からの二次加工を行っている。2はかなり分厚い素材を利用しており、三角形の断面を形成している。中央よりやや上部では、この断面の稜線何れをも敲打に近い加工で角を潰している。用途に付いては不明と言わざるを得ない。3は表面に自然面を残す大型の剥片を加工しており、所謂打製石斧に似るがこの一点のみの出土であり、その用途等は不明である。4は右側面にわずかな二次加工が見られる。5は一辺にほぼ片面からのみの二次加工を施し比較的分厚い刃部を設けている。

第17図・18図は緑色安山岩製の石皿である。ただし中期のそれとは違い、中央部に明瞭な凹があるわけではなく、台石と表記した方が良いかもしれない。どちらも表裏とも自然面でほぼ一定の厚みである原石から作られている。この原石を割った（あるいは割れた）ものを素材に、側面を剥離や敲打で形状を整えている。表裏の平坦な面（自然面）には特別に加工や使用の痕跡は見いだせない。なお第17図1は床面から出土している（第7図参照）のに対し、第18図1は同じ石材で同様の石器であるが覆土中から出土している。また同じ石材の破片が一点床面から出土している（第7図参照）。

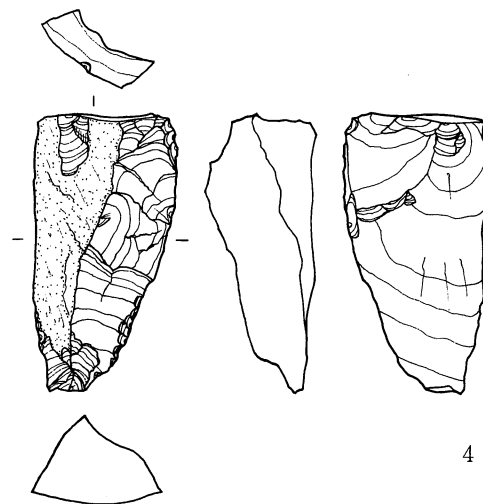
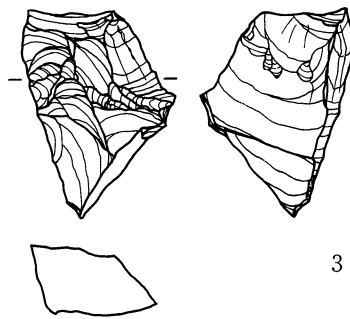
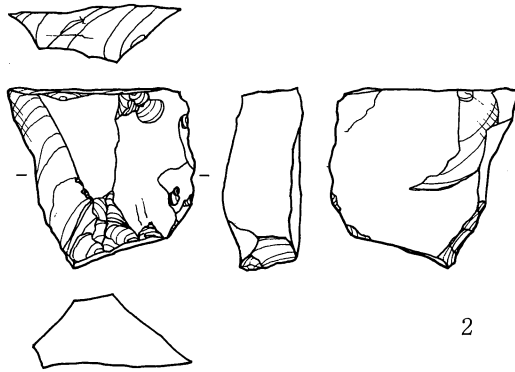
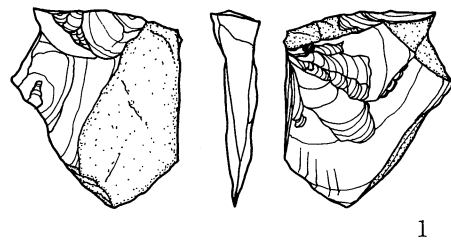
この他図示はしていないが数点の砂岩原石及び剥片、微細な黒曜石の剥片1点などが出土している。

先に記したように、本遺構からの石器、中でもチャート製石器の出土量は凄まじいもので、ここに図示出来たのは、点数でいっても全体の1割にも満たない。これら図示しなかった中にもおそらく、石器製作の過程を復元する上で有益な情報を有する資料が多数あると思われる。今後の活用を計りたい。



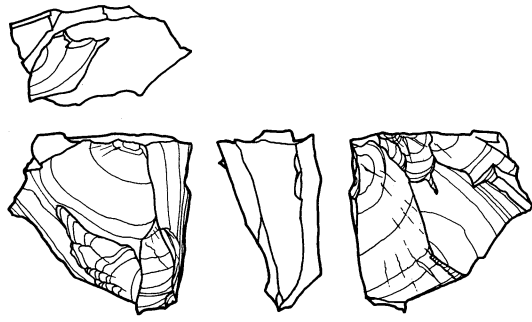
(2 : 3)

第12图 2号住居址出土石器(3)

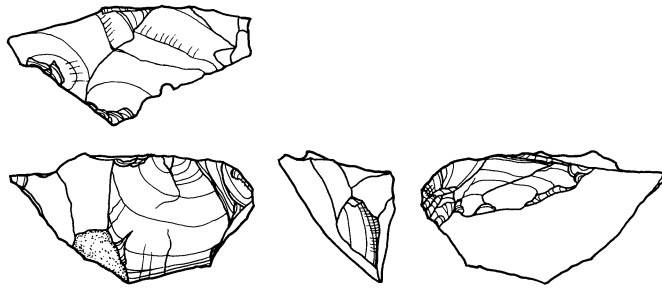


(2 : 3)

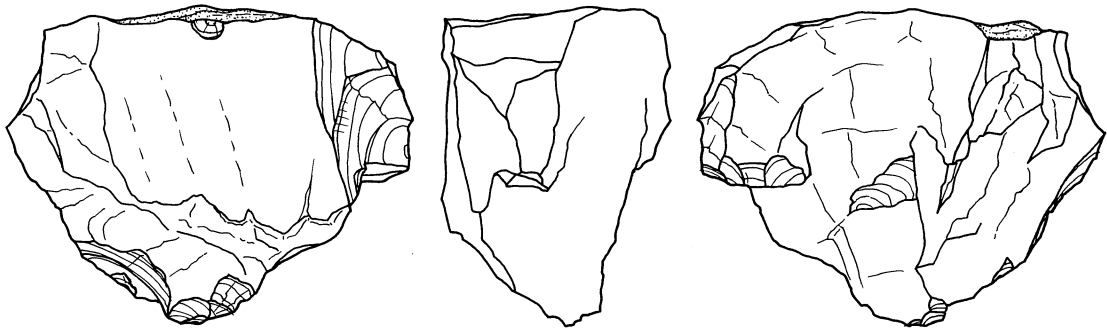
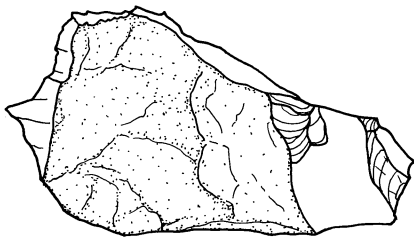
第13图 2号住居址出土石器(4)



1



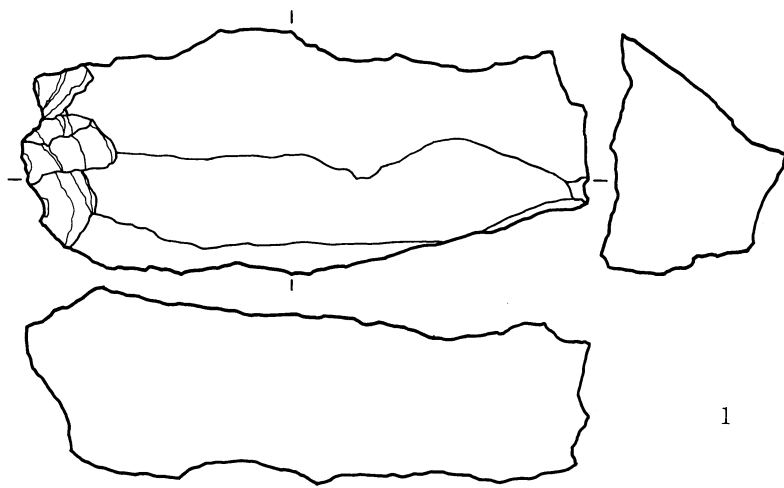
2



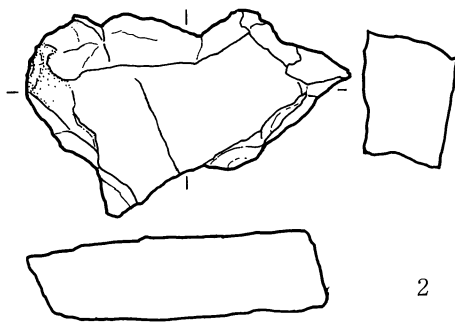
3

(2 : 3)

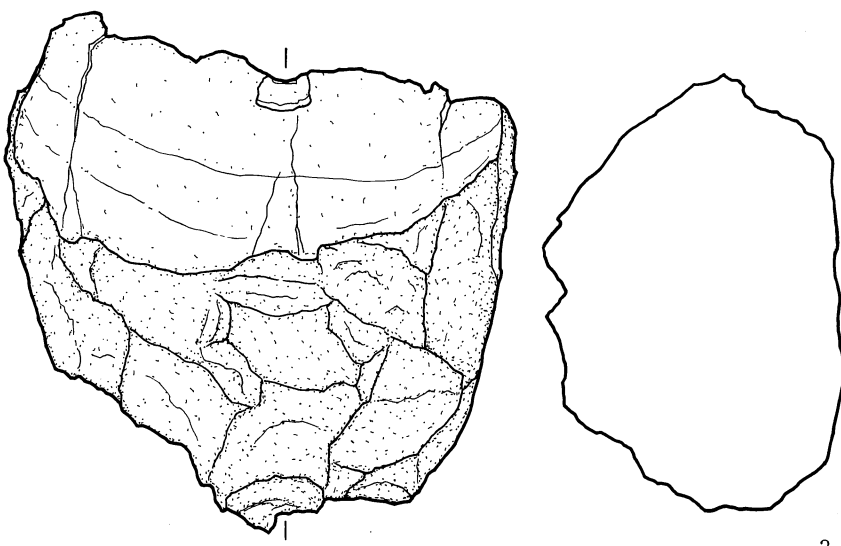
第14图 2号住居址出土石器(5)



1



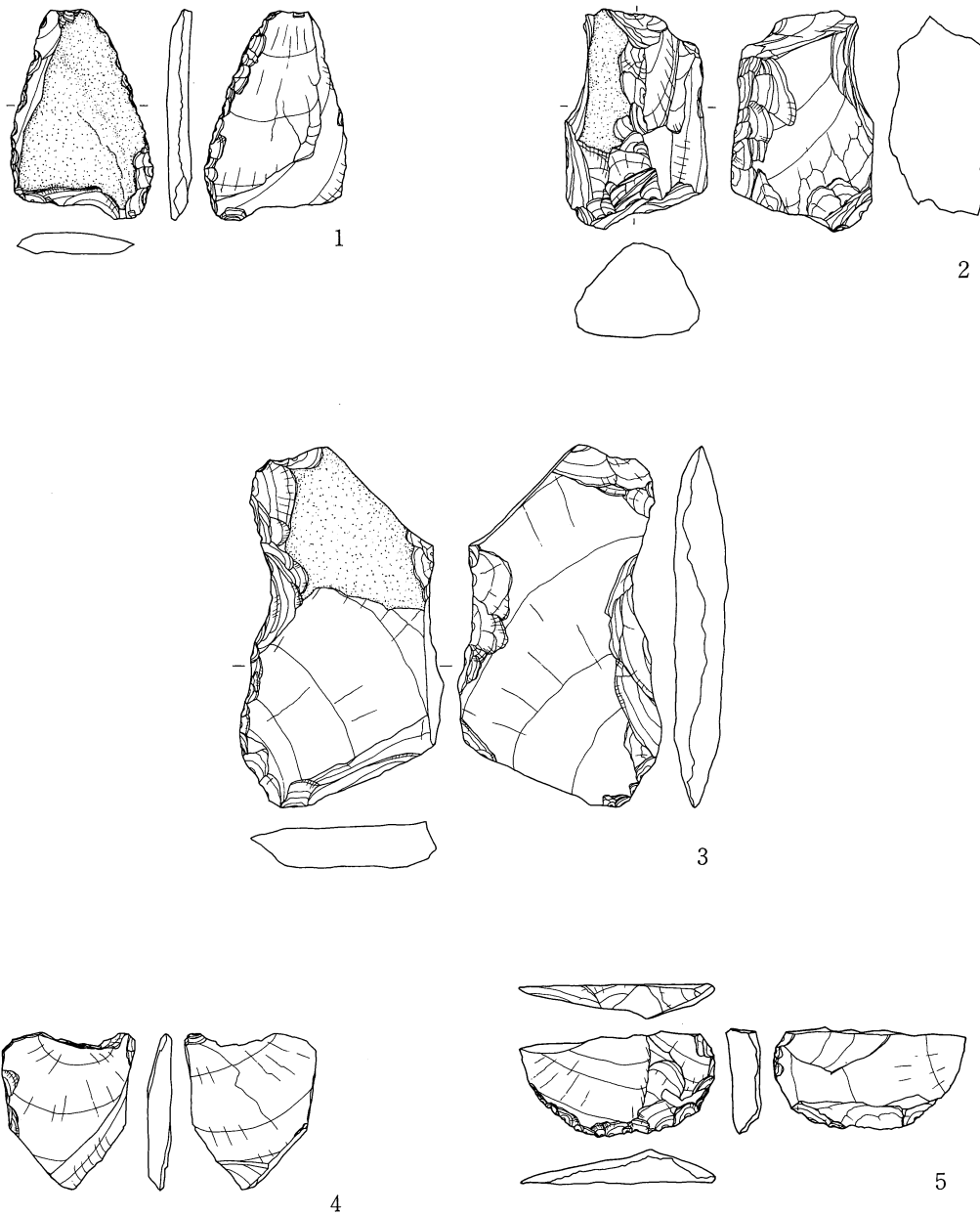
2



3

(1 : 3)

第15图 2号住居址出土石器(6)



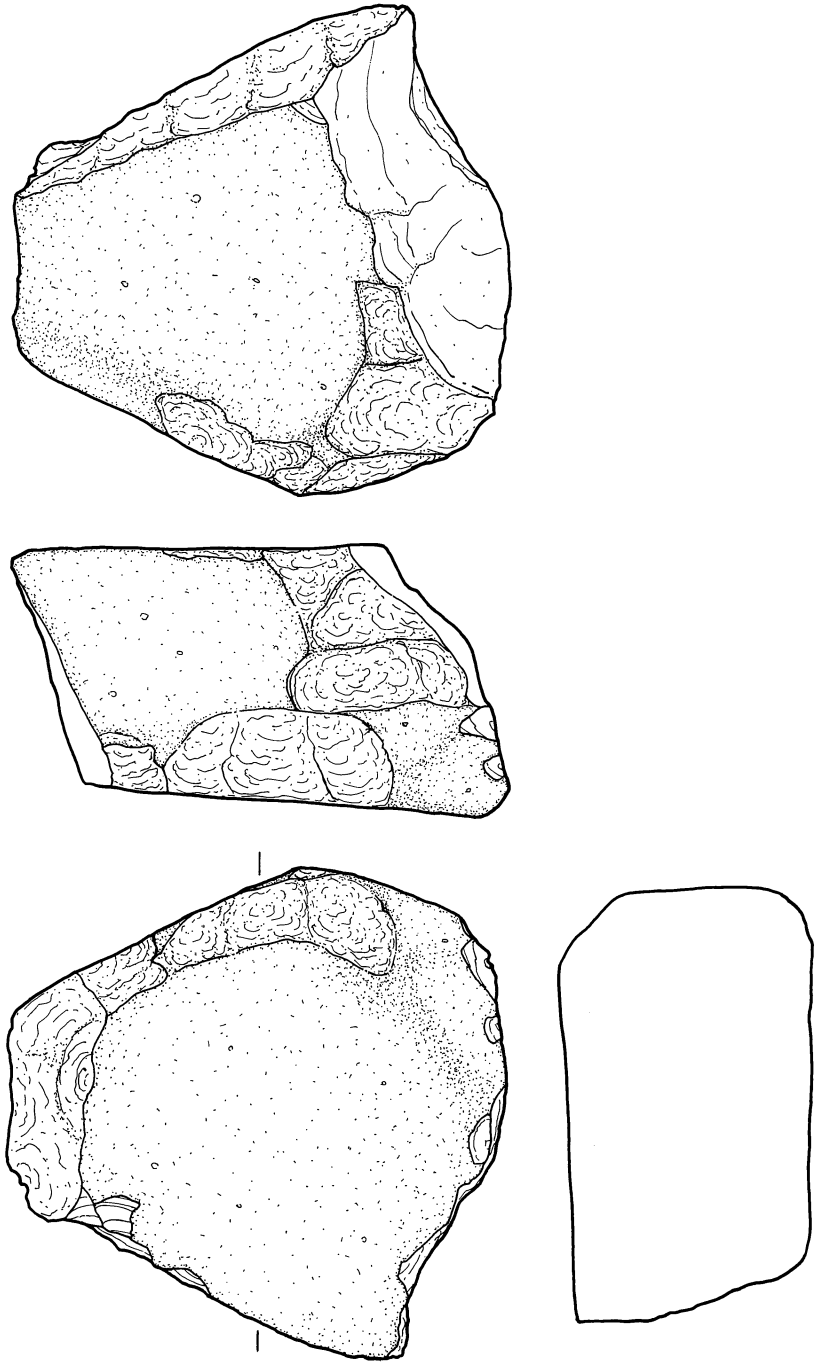
(1 : 3)

第16図 2号住居址出土石器(7)

時 期

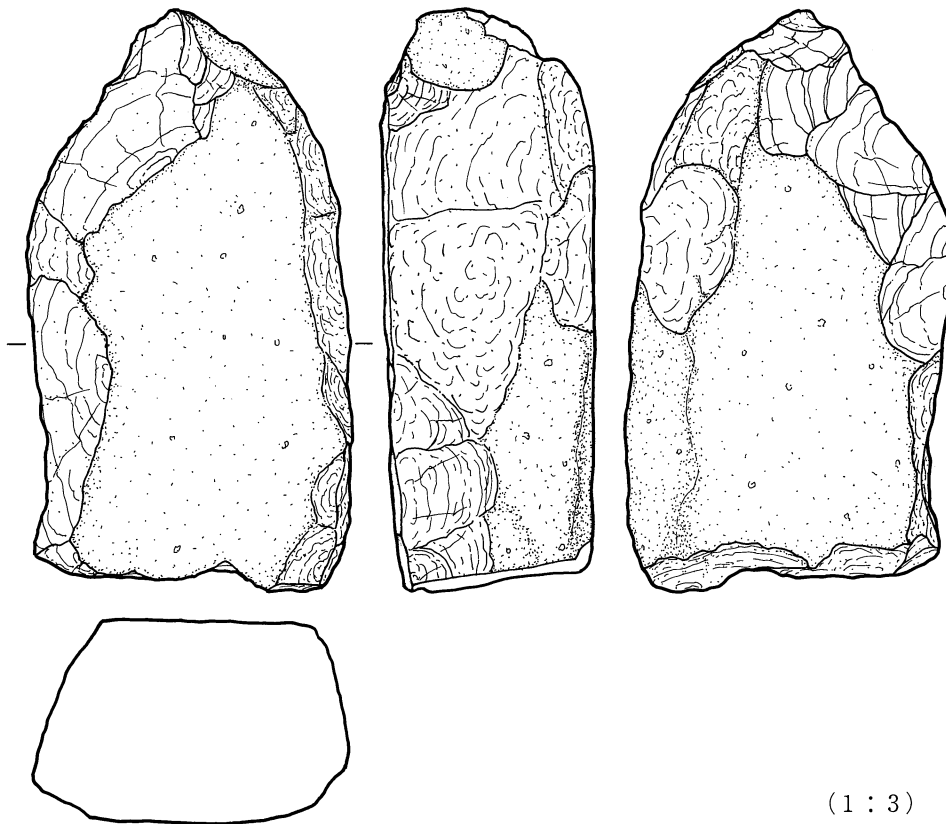
不整形で柱穴のない遺構の形態、焼成の弱い炉址、また出土した土器、石器の特徴から、縄文時代前期初頭の遺構と考えられる。

しかし全てを一括の遺物と捉えると、これだけの量の剥片が散乱した状態では、住居としての機能は成立しがたいのではないかという疑念も浮かぶ。通常の住居としての利用と、石器製作の空間としての利用時期にずれがあったとするほうが妥当かも知れない。しかし土器と同様チャート石器も床面近くからも出土しており、さらには他の時期の遺物が混入しているような状態には無いことから、ここでは出土した遺物全てが、ほぼ同時期のものとして捉えておきたい。



(1:3)

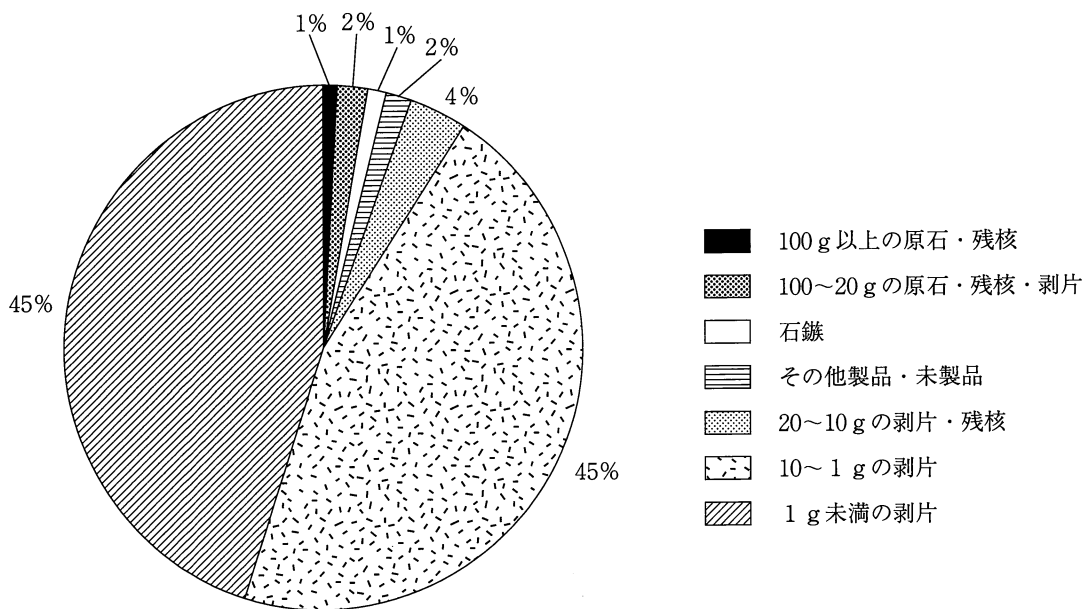
第17图 2号住居址出土石器(8)



(1 : 3)

第18図 2号住居址出土石器(9)

第19図 2号住居址チャート石器組成グラフ



節理面の解釈により、原石であるか残核であるか、また残核であるか剥片であるかなど分類が難しいものも多く、ここでは製品以外を重量により分けた。

尚、集計に用いたチャート石器の総数は852点である。

Ⅳ-3 1号土坑

遺構

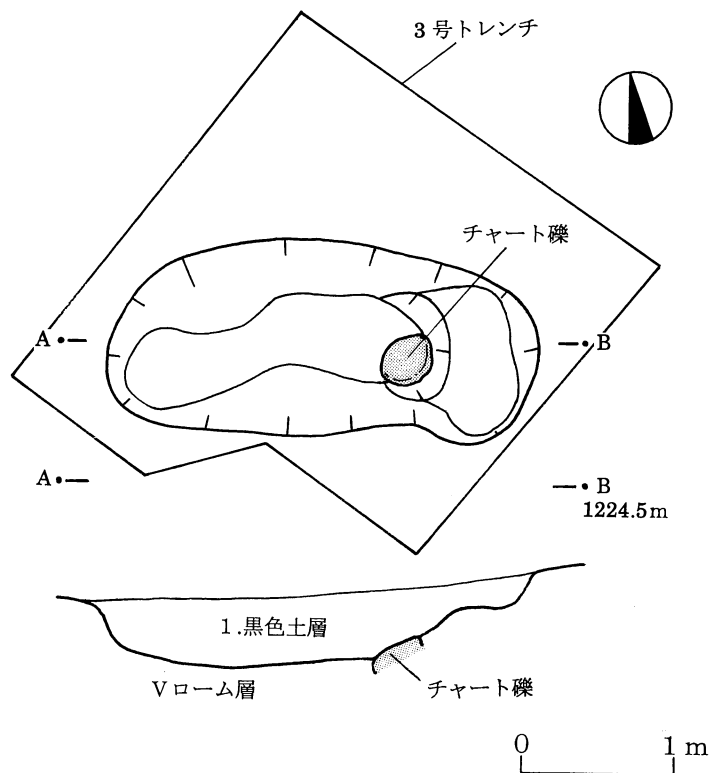
3号トレンチで発見された土坑。プランの確認時には、2つの遺構がかみ合っている可能性も考えたが、セクションでは分層出来るような違いも認め難く、東側に一段浅いテラスのある一つの土坑とした。長軸285cm、短軸130cm、遺構確認面からの深さは45cm。またテラスからの落ち込みには、V層：ローム層中に含まれるチャートの礫が露出していた。用途については不明と言わざるを得ない。尚、現地表面から遺構確認面（V層：ローム層の上面）までの深さは約60cmであった。

遺物

覆土中の遺物は2号住居址と同質のチャートの剥片と、やはり2号住居址に見られる凝灰岩の剥片が計3点見られたのみである。

時期

出土遺物より2号住居址と同一時期、縄文時代前期初頭のものと思いたい。



第20図 1号土坑平面及びセクション図（1：50）

Ⅳ－４ 木次原遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

木次原遺跡では、これまでに石鏃、土師器、縄文土器などの遺物等が確認されている。今回は、工事で作成された断面に見られた住居址（1号住居址）の調査が行われ、奈良時代の可能性がある土師器の破片2点と住居構築材とも考えられる多数の炭化材が出土した。

本報告では、1号住居址から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、構築・使用期間を明らかにする。また、炭化材の樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、1号住居址から出土した木材3点（木2, 5, 6）である。いずれも炭化しているが、木5は生木の部分が多く残されており、年代測定には生木の部分、樹種同定は炭化材の部分をそれぞれ使用した。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

a) 前処理

炭化材（木2, 6）は、乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に塩酸を加え、煮沸した。煮沸後、塩酸を水で充分洗い流し、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭化カルシウムを回収した。

生木（木5）は、水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥、粉碎後、塩酸で煮沸した。塩酸を水で充分洗い流した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン5ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して5mlとした）にシンチレーターを0.075g加えたものを測定試料とした。

c) 測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

d) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結 果

年代測定結果および樹種同定結果を表1に示す。年代測定の結果は、1320BP～1220BPであった。また、樹種は全て針葉樹のヒノキ科に同定された。主な解剖的特徴を以下に示す。

表1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

| 遺 構 | 番号 | 試料の状況 | 樹 種 | 年代値 | 誤 差 | | Lab-No |
|-------|----|--------|------|------|------------|------------|---------|
| | | | | | + σ | - σ | |
| 1号住居址 | 木2 | 炭化材 | ヒノキ科 | 1320 | 60 | 60 | PAL-715 |
| | 木5 | 生木と炭化材 | ヒノキ科 | 1280 | 120 | 120 | PAL-716 |
| | 木6 | 炭化材 | ヒノキ科 | 1228 | 90 | 90 | PAL-717 |

- 1) 年代は、1950年を基点とした年数。
- 2) 放射性炭素の半減期は、LIBBYの5570年を使用した。
- 3) 誤差は、測定誤差 σ を年代値に換算した値。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

仮道管の早材部から晩材部への以降は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は窓状でないことは観察できたが、保存が悪く詳細は不明。放射組織は単列、1～10細胞高。

4. 考 察

(1) 年代値について

1号住居址からは、住居構築材などと考えられる炭化材が多数出土している。このうち、3点の木材・炭化材について放射性炭素年代測定を行った結果、1320BP～1220BPの年代値が得られた。この結果は、住居址から奈良時代の可能性がある土師器の小片が出土していることとも調和的である。

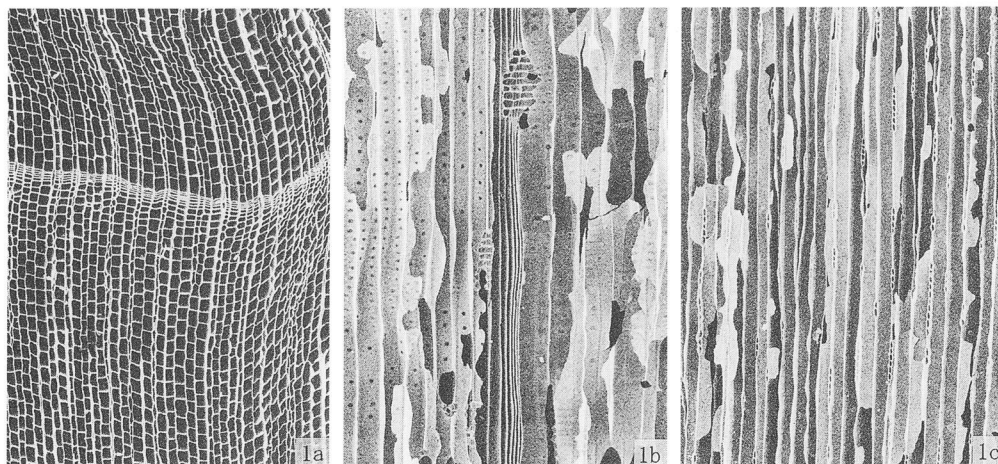
樹木は生育中でも樹心に近い部分から活動を順次停止していくため、樹木の中心に近い部分で年代測定を行えば、実際の伐採年との差だけ誤差が生じることになる。今回の試料間の誤差もこのような樹齢の差等を反映したものと考えられる。

(2) 用材について

1号住居址から出土した試料の一部には、生木の部分が残存しているものがあつた。このことを考慮すると、火災などで炭化した可能性がある。また、試料の多くの床面付近から出土していることから、住居構築材や壁材などの構築部材に由来することが推定される。これらの木材・炭化材は、同定を行った3点全てが針葉樹のヒノキ科であつた。同定した全点が同じ種類であつたことから、住居内に残されていた部材の多くがヒノキ科の可能性もある。ヒノキ科には有用材が多く含まれるが、現在の周辺植生(宮脇, 1985; 戸部ほか, 1987)などを考慮すればヒノキ属(ヒノキ・サワラ)、クロベ、アスナロなどが考えられる。

長野県佐久盆地周辺では、縄文時代から古代にかけての住居構築材の樹種同定結果が多数報告されている。古代の住居構築材に針葉樹の利用が確認された例は、関口A遺跡および関口B遺跡、大塚原遺跡で報告されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1991, 1994)。しかし、いずれの場合も広葉樹のコナラ節などを中心としており、針葉樹は僅かに含まれているだけであつた。したがって、今回の結果とはやや傾向が異なる。

図版1 炭化材



1. ヒノキ科 (1号住居址 木6)

a : 木口, b : 柃目, c : 板目

200μm : a

200μm : b, c

佐久盆地と比較すると、本遺跡はさらに標高が高く、山地に囲まれている。このような立地環境の違いが、用材の異なる背景としてまず考えられる。しかし、本地域周辺でもミズナラ（コナラ節）やクリなど、住居構築材によく利用される広葉樹材が入手可能である。このことを考慮すれば、建物の用途や性格、建築方法などが用材に関係している可能性もある。今後、周辺で類例を蓄積して、用材の傾向などを把握したい。

参考文献

宮脇 昭編 (1985) 日本植生誌 中部, 604 p, 至文堂

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1991) 関口A・B遺跡出土材の樹種同定、小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集「関口A・関口B・下柏原」, p.245-254, 小諸市教育委員会

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1994) 大塚原遺跡における平安時代の住居構築材, 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集「大塚原 (第二次)」, p.81-84, 小諸市教育委員会

戸部正久・里見哲夫・島野好次・松沢篤郎・須藤志成幸 (1987) 群馬県高等植物目録, 「群馬県植物誌 改訂版」, p.153-393, 群馬県・群馬県高等学校教育研究会生物部会

Ⅳ-5 1号住居址断面の保存処理について

今回の調査では、1号住居址と認定された遺構の活用が問題とされていた。この断面を何らかの方法で保存公開することを検討し、断面の剥ぎ取りを行うこととした。剥ぎ取りは白沢勝彦氏はじめ長野県立歴史館保存処理室の方々の指導を頂き、北相木村教育委員会が行った。以下にその過程を記す。

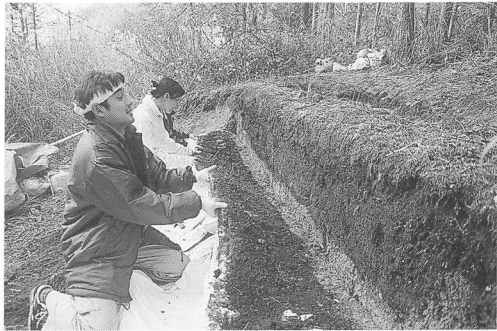
- (1)土層断面を精査する(写真①)。
- (2)土層断面にエポキシ樹脂(トマックNR-51)を塗布する。
- (3)塗布後の土層断面に布を強く押し当てて密着させる。
- (4)土層断面に密着させた布の上に、さらにエポキシ樹脂(トマックNR-51)を塗布して布を補強する。
- (5)一昼夜後、慎重に布を引き剥がす(写真②)。
- (6)土層転写物の表面保護のため土層面にイソシアネート樹脂(サンコールSK50)とアクリル樹脂(パラロイドB-72)を塗布する(写真③)。
- (7)木枠を作り、土層転写物をエポキシ接着剤で接着する。
- (8)剥ぎ取りで欠けた部分をパテ状エポキシ樹脂(WR-200)で補い着色する。

以上のような工程で断面パネルを作成した。結果として黒色土層、ローム層とも剥ぎ取りやすい性質だったためか、剥ぎ取り自体は失敗無く行えた。しかし剥ぎ取り後の布の変形が予想以上で、完成したパネルは本来無かった凹凸を有すこととなってしまった(写真④)。

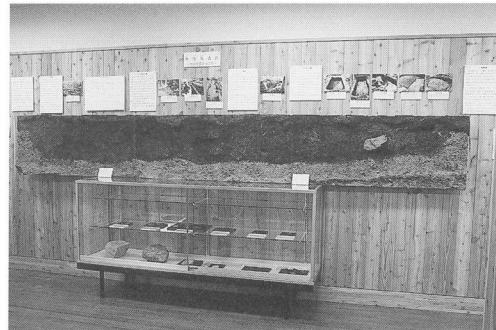
なお完成したパネルは現地で公開という案もあったが、パネルの劣化等を考慮し、村施設である「長者の森」の「森林体験センター」内で遺物や調査写真とともに展示することとした。



①断面剥ぎ取りの様子



②断面剥ぎ取りの様子



④完成した断面パネル

③剥ぎ取った断面に樹脂を塗布

V 考 察

木次原遺跡 2 号住居址より見る縄文前期の石器製作過程の復元

野口 淳・藤森英二

本調査で確認された 2 号住居址からは多量のチャート製石器が出土した。そこから考えられる石器製作の過程の復元を試み、同時期の石器製作技術の特徴と対比した。

【1】 2 号住居址における石器製作の復元

① 原石の入手

出土した原石（チャート）は、円礫（川原石）ではなく、層状節理に沿って露頭より崩落した後、あまり転磨を受けていない（淘汰されていない）角礫状のものであり、各石器の自然面の観察（やや風化した節理面＝自然面の可能性）から、チャート岩脈の露頭直下かその周辺、近接する河川上流部が採取地と想定される。原則的に入手・搬入の後、石器の製作（原料の消費）が逐行されるので多くは遺存しない。出土した大型原石（残核）（第15図 1～3）は石器石材として不適當だった可能性がある。

② 粗割り

原石の平坦面を打面とし、適宜厚手の剥片を打ち割っていた段階。原石の平坦面を打面とし、稜（角）を手がかりとして剥離を行う。背面の自然面の範囲及び剥片自身のサイズは順次小さくなる。自然面を平面の大部分ないしは前面に残す大型で厚手の剥片はこの段階のものと思われる（第13図 1、2）。ただし剥片の一部は③石核素材（第13図 4）とされ、さらに剥離（変形）が加えられるか、別地点（他遺構への廃棄単位を形成するに至った作業地点、あるいは他遺跡）に搬出されるため資料の遺存量は少ない。その他は不要品（残滓）として破棄されるが石核は作業の進行に伴い変形されるので多くは遺存しない。

③ 剥片剥離

①から継続的に剥片剥離を行う。作業の進行（石核の消費）に伴って自然面の付着しない剥片が剥離されるようになるが、作業面を転位した場合には再び自然面付着の剥片も生じる。石核調整をほとんどしないので剥片の形状は一定していない。

搬出のためか、剥離の進行（石核の変形）が著しいためか、途中経過における石核形状、打面、作業面の設定、石核調整の有無多少といった作業工程の技術的特徴はあまりはっきりしない。

ただし剥片背面の剥離方向が一定しないことから、一定の打面、作業面から、連続的に剥離される剥片（主要剥離面と同一方向の剥離面からなる背面構成をもつ：第12図 2、3）はあまり多くなかったと予想される。剥片形状は加撃時の石核形状（一手順前の剥離作業の結果）、打面、作業面の選択により、大枠では a～c の類型に分けられる。このうち実際に素材剥片として選択されたものは、二次加工により石器形態に変換（変形）されるか、あるいは別地点へ搬出されるので多くは遺存しないが、製品石器の形状及び未製品から推測は可能である。

a. 石核上の稜（角）を取り込むと分厚い（相対的に大きい）剥片が剥離されるが連続的には剥離されな

- い（第13図3）。
- b. 平坦な面を作業面とすると寸詰まりの幅広な剥片（長幅比1：1～1：2）が得られる。一部は石鏃の素材とも思われる。連続的な剥離も可能となる（第12図3～5）。
- c. 打面の厚さが大きくなると（打面の縁から奥過ぎる場所を加撃点とすると）、より横長の剥片が得られる。一部は石錐の素材とも思われる（第12図9、10）。

③剥片素材石核

①②aなどで生ずる大型剥片は、さらに石核の素材とされる。その際石核素材腹面（素材剥片の主要剥離面）を作業面とした場合、剥離される剥片は背腹両面ともポジ面となる。実際に背腹両面ポジ面の剥片の出土から、この段階の存在は確認出来る（第12図6、7、8）。縦横断面とも凸レンズ状となるこの剥片は、石鏃素材に適したものであったと考えられる（第10図11）。石核も少数ながら認められるが、さらに両極打法などにより変形（消費）されたか搬出されたため遺存していない可能性がある。

④両極打法

残核および剥片の一部に、両極打法の痕跡が認められる。素材がやや大きめで厚いこと、石質による要因、末端部の潰れなどから、両極剥離痕の見られない剥片、石核についても、両極打法によるものが含まれている可能性はある。

両極打法は①～③各工程において適宜行われた可能性がある。とくに工程の初期、原石、石核サイズが大きい時点では両極剥離痕や末端の潰れが生じない場合も多いので確認は難しい。②工程では確認点数は少ないが確実に行われていた（第11図6）。変形（消費）の進行に伴い石核サイズが小さくなった場合、通常の直接打撃法では、石核の保持、一定以上のサイズの剥片剥離が困難となるために採用されていた可能性がある（第11図7、8）。工程初期においても、大型原石を分割したり、あるいは潜在する節理面をあらかじめ割ってしまうために採用されていたのかも知れない。

なお、非加工物に押し当てハンマーによる加撃を加えることにより、楔として機能していたと考えられる石器（楔形石器、所謂ピエスエスキュー・第11図5）及び加撃時に生じる削片は非常に少ない。

⑤二次加工

以上の工程によって生じた剥片を適宜道具へと加工する。石鏃の未製品あるいは失敗品と思われるものが見られる（第10図6～11）。他には必要に応じて各段階の剥片・石核に二次加工を施しているが、同じ廃棄単位として捉えられるかどうかは判然としない。なお工程の比較的初期に剥離される大型の剥片については③石核素材となった可能性とともに、削器類の素材とされている可能性があるが、出土石器群からは観察されない（御代田町下弥堂遺跡などの事例から蓋然性が高い。搬出の可能性）。

以上から、木次原遺跡では、原石の搬入→剥片剥離→石器製作（石鏃・石錐等）の一連の作業が行われていたことが推測される。出土石器群からの欠落部分については、遺跡内の別遺構、別地点に遺存している可能性があり、この場合作業途中で素材（石核・剥片）を持ち出し、別地点で別の作業に供したか、あるいは廃棄時に何らかの理由で別の単位で分けられた（ゴミの分別、量が多いので分けたなど）可能性、製品石器になっていたものについては、使用のために持ち出され、廃棄の場所やタイミングが分かれた可能性が考えられる。製作途上の未製品、失敗品以外の製品石器は、基本的には製作時の同じ廃棄単位に含

まれることはないと考えられる。残滓と共伴する製品石器は新たに製作・補充された石器と交換されて、装備から外されたものと捉えるべきである。消耗、破損による廃棄石器が生じたことは、より積極的に新たな石器を製作・補充する契機となった場合も少なくなかったであろう。とくに本来は組成していたと思われる削器類については、使用頻度、耐用期間の関係上「2号住居一括」廃棄単位の形成時には、消耗・廃棄に至らなかった可能性が考えられる。このためこの時点では新規に製作補充されなかった可能性も考えられるが、素材となり得る剥片自体が欠落していることから、後の時点での製作を睨んでの素材の搬出が行われたか、あるいは製作した上での搬出、後の消耗・補充に備えていた可能性も考えられる。なお凝灰岩の資料も同様で、おそらく石斧製作（再加工）残滓と副次製品（削器B）のみが存在する。

【2】石器製作技術の特徴と周辺遺跡との比較

木次原遺跡2号住居址とほぼ同時期と考えられる御代田町塚田遺跡、下御堂遺跡（御代田町教委 1994）の石器群との比較を行ってみたい。

① 技 術

石核調整を用いない「取れそうなところから、取れそうなものを」剥離する技術（剥離の進行に伴う石核形状の変化に依存する）。

a) 緻密質・ガラス質の石材（黒曜石、チャート、珪質頁岩、玉髓、メノウ、鉄石英、黒色頁岩など）

小型の幅広剥片と、大型剥片を石核としてそこから生じた両面ポジティブ面の剥片を石鏃の素材にする。この工程は木次原遺跡2号住居址と重なる。また大型剥片を削器に加工した石器は木次原では欠落している。

b) 非ガラス質・緻密質～細粒・大型の原石が確保できる石材（凝灰岩、細粒安山岩、珪質頁岩、砂岩、粘板岩など）

礫器の調整剥片や大型剥片から削器B（横刃型石器）を、大型剥片から石斧（所謂打製石斧とはやや異なる）を作成している。木次原では素材搬入、調整または石器搬入、再加工のみの可能性がある。

c) 中～粗粒・硬く重量感のある石材（砂岩、安山岩、玄武岩、石英斑岩など）

石皿、磨石など。木次原では安山岩の石皿のみが出土している。

② 石 材

南北佐久の両地域で、石鏃等に用いられる a) の緻密質・ガラス質の石材について以下の表にまとめた。

| | 緻密質・ガラス質の石材 | | 産 地 | 備 考 |
|------------------------|-------------|-----------------------|--------------------|--------------------------|
| 北佐久地域 (塚田) (下御堂) | 近距離 | ◎硬質（珪質）頁岩 ◎ガラス質安山岩 | 四賀川 八風山 | |
| | 遠距離 | 黒曜石 チャート | 霧ヶ峯、蓼科 相木川？ | |
| 南佐久地域 (木次原) | 近距離 | ◎チャート | 相木川 | |
| | 遠距離 | 黒曜石 鉄石英 | 霧ヶ峯、蓼科、麦草？ 群馬方面 | チップ1点のみ(混入の可能性) 石匙、剥片 |

◎が主体的な石材

南北佐久地域とも、近距離系の石材が主体となる点は共通する。しかし北佐久の2遺跡では、主体となる近距離石材の他に、南佐久産と思われるチャートや、霧ヶ峯、蓼科の黒曜石など遠距離石材が少なから

ず出土するのに対し、南佐久の木次原では、近距離石材のチャート以外では、黒曜石、鉄石英が極少数出土したのみである。

北佐久との相違点については、いくつかの可能性が考えられる。①調査範囲が狭いこと：調査範囲外の遺構、包含層中に残されている別の廃棄単位には、黒曜石をはじめとする遠距離石材が含まれている可能性がある。この場合、南北佐久の様相は共通していることになる。②立地の問題：千曲川から分かれて関東山地に分け入る相木川の上流部は、日常的な生活範囲や、資源の獲得と運搬の経路などが佐久平一帯とは異なっていた可能性がある。あるいはチャートの岩帯に近接している資源環境から、遠距離石材の獲得、搬入が行われなかった可能性も含まれる。

この時期の佐久地域周辺に目を向けると、群馬県の吾妻川上流域では、やはり近距離石材（珪質変質岩、チャート）が主体となっている（長野原町教委 2000）。千曲川を下った上小地域では、黒曜石原産地帯へ通じる依田川流域に黒曜石を主体とする遺跡が点在するが、この一帯（長門町、丸子町等）では黒曜石が近距離石材ということになり、その出土が多い。

何れにせよ、石材選択の地域性の強い時期であると言える。

【3】北相木村における石器研究の展望

このように南北佐久の前期初頭の遺跡において見られる、異なる技術・使用系列の石器に、異なる石材を充てる（入手・製作・廃棄連鎖も異なる）様子は、縄文時代的と言える。この点、北相木村の栃原岩陰遺跡下部層（草創期末）とは明確な差があり、中部層（早期前半）との比較でも、少なくとも器種組成は変化している。また草創期・早期ともに石材の大部分が黒曜石である点も明確な違いである（藤森 1998）。このような変化は、縄文時代の居住形態の変化を示しているとも考えられる。

また早期後半～末頃より、地表面下に埋没した黒曜石原石の採掘活動が開始されたようであるが（鷹山遺跡群調査団・山科 2003）、遠隔地ではまだまだ在地的石材が中心であった。あるいは木次原遺跡などは、黒曜石を補完する石材としてのチャートの原産地遺跡に類する位置にあった可能性もある。

その後、前期後半から中期にかけて、東北から北陸まで、また関東平野から濃尾平野まで、広範囲にわたって「黒曜石狂の時代」^{オブシディアン・ラッシュ}が到来する。北相木村内では、中期の遺物の大量の出土をみた坂上遺跡などで（北相木村教委 2000）、今後さらなる発掘があれば、このような状況が見られるかも知れない。

今後も具体的な変化の時期や地域性について詳細な検討が望まれる。

参考文献

- 御代田町教育委員会 1994 『塚田遺跡』
- 御代田町教育委員会 1994 『下御堂遺跡』
- 藤森英二 1998 「栃原岩陰遺跡出土の石核から」『佐久考古通信』No.72
- 長野原町教育委員会 2000 『坪井遺跡Ⅱ』
- 北相木村教育委員会 2000 『坂上遺跡』
- 鷹山遺跡群調査団・山科 哲 2003 「2002年度（平成14年度）長野県小県郡長門町鷹山遺跡群の発掘調査」『第15回長野県旧石器研究文化交流会—発表資料—』

VI ま と め

現在発掘調査の多くは、開発行為に先立つ緊急調査として行われる。そこには担当者や携わった人々の汗と涙が刻み込まれているが、限られた時間や予算の中で、全てに納得のいく調査は難しいものである。そんな中、本件は特殊な経緯を辿りながら、結果的に竪穴住居址2基と土坑1基を延べ日数で1ヶ月弱かけて調査するという、非常に贅沢な調査となった。

主だった成果をまずまとめると、古代土師器を伴う奈良から平安期の竪穴住居址を確認し、検出された炭化木材で¹⁴C年代、樹種の特定分析を行ったこと、また縄文時代前期初頭の住居址を確認し、特に大量のチャートの出土から、石鏃等の製作過程の考察を行い得たことがあげられよう。しかし遺跡からの情報を十分に引き出せなかったのは、担当した藤森の経験不足と言われても弁解の余地は無く、反省しきりである。

この木次原遺跡は現在私有地であるが、遺跡を東西に分断する県道部分をのぞき、大部分がカラマツの植林地と畑作地で、遺物包含層、遺構確認面は充分残されているようである。ただ過去に縄文時代草創期の有茎尖頭器が拾われたという県道南側部分については、未だ調査が及んでおらず未知数であると言わざるを得ない。このように遺跡としては未解明な部分もあるが、未発掘部分は将来への遺産とし、ひとまず現地での調査を終えることとした。

縄文時代については野口淳氏の御力を頂き、前期における石器製作過程のみならず、石材獲得の問題に一石を投じる考察を行い得たかと思う。チャートという在地石材の利用は、本遺跡より約10km下流の「栃原岩陰遺跡」における積極的な黒曜石の利用とは対照的であり、これが時期的な違いによるのか、あるいは黒曜石原産地からの距離により生じた差異なのか、付近の遺跡を見ながら検討していく必要を感じる。

また全くの私見ではあったが、8世紀から9世紀の間にこのような山間部に生活があったことを思うと、平安時代に出現していた木工細工を生業とする木地師と木次原（“きつぎはら”は“きじはら”とも読めなくはない）という地名に関連を求めたくなり、さらに木地師には小椋姓が多いが、当村の最高峰を御座山おぐらと呼ぶことに関連はないだろうか、という想像もしてみた。しかし文献史料では江戸末期、安政6年（1859）頃までに北相木村名主の木次周蔵が新田開拓し、ここから木次原と呼ばれるようになったとされている。ちなみに文政・安政年間には北相木村内にも木地師が居り、木次原より約2km下流の白岩地区木地日陰には「木叟仙学士」と刻まれた木地師の墓があり、村内大龍寺の過去帳には「小椋清兵衛の父で寄沢に埋める」と書き残されている（菊池 1977）。また南隣の南相木村や、峠を越えた群馬県上野村にも江戸期木地師が存在していたそうである。結論的には今回の古代住居址と木地師の存在が関連するという材料は無いが、住居址出土の炭化木材が建築材料としてはあまり例のない針葉樹であることを含め、今後古代の山村の営みを考える際の材料にはなるのではないか。

尚、現在遺跡現地には説明板を設置し、遺物の一部と1号住居址の断面を遺跡からほど近い村営レジャー施設「長者の森」内の「森林交流センター」に展示している。「長者の森」の運営期間が4月末から10月末までと通年の展示とはなっていないが、村内外の方々に遺跡を知ってもらおうという当初の目的は果たせるかと思う。また検出された遺構は全て現地で土嚢により保護している。

そしてもう一点、このような小さな調査にもかかわらず、考古学専攻の学生や長野県立歴史館の方々、その他専門家のお力添えを頂いたこと、また発掘調査から整理作業まで、村民の方々が積極的にかかわっ

て下さったことを、感謝の意と共に付け加えておきたい。

もし将来、北相木村の住民の中から、調査や研究への熱意が起これば、その時は今一度スコップを持ち、この遺跡に立ちたいと思う。

主な引用参考文献

菊池清人編 1977 『北相木村誌』 北相木村誌刊行委員会

北相木村教育委員会 1980 『北相木村遺跡分布調査』

御代田町教育委員会 1988 『鑄師屋遺跡群 十二遺跡』

北相木村教育委員会 2000 『坂上遺跡』

利涉幾多郎 2001 「ノッチの形成史から復元される古水文史—長野県千曲川上流、北相木川のノッチと段丘を例に—」『第四紀』33

北相木村教育委員会 2002 『国史跡 栃原岩陰遺跡・天狗岩岩陰』

付表1 土器観察表

| 遺構 | 図版番号 | 器種 | 部位 | 文様及び外面調整 | 内面調整 | 胎土 | 繊維 | 外面色調 | 内面色調 |
|-------|------|-----|------|-------------------|---------|---------------|----|----------|----------|
| 1号住居址 | 6 | 小型甕 | 口縁部 | | 横ナデ | 輝粒子・黒色粒子・白色粒子 | | にぶい橙色 | にぶい橙色 |
| 1号住居址 | 6 | 甕? | 胴部 | | | 白色粒子・輝粒子・小石 | | 明赤褐色 | 明黄褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 口縁部 | 沈線・隆帯・縄文RL (0段多条) | 横ナデ | 白色粒子・赤粒子・小石 | 多 | 黒褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・RL (0段多条) | 横ナデ | 白色粒子・赤粒子・小石 | 多 | 暗茶褐色 | 暗茶褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 口縁部 | 縄文RL (0段多条) | | 輝粒子・白色粒子小石 | 多 | 黒褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR (0段多条) | 横ナデ | 白色粒子・輝粒子少 | 合 | 明赤褐色 | 黒色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文RL (0段多条) | | 白色粒子多・輝粒子 | 合 | 黄赤褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・RL (0段多条) | 横ナデ | 白色粒子多・輝粒子 | 合 | 暗茶褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文RL | 横ナデ | 白色粒子多・輝粒子 | 合 | 黒褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・RL (0段多条) | | 赤色粒子・白色粒子・小石 | 多 | 黒褐色・黄褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・RL (0段多条) | 横ナデ | 輝粒子・石英・白色粒子 | 合 | 暗黄褐色・黒褐色 | 暗黄褐色・黒褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・指頭痕 | | 黄白色粒子・輝粒子・小石 | 多 | 赤褐色 | 暗赤褐色 |
| 2号住居址 | 8 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR・RL | 指頭痕 | 黄白色粒子・輝粒子・小石 | 多 | 赤褐色 | 暗赤褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 縄文LR (0段多条) | | 白色粒子・輝粒子 | 合 | 黄褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴下半部 | 縄文LR (0段多条) | 横ナデ | 白灰色粒子・輝粒子 | 多 | 黄褐色 | 灰褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 底部付近 | 縄文LR・RL (0段多条) | | 白色粒子・輝粒子 | 合 | 灰赤褐色 | 暗茶褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 底部付近 | 縄文LR | | 石英・黄白色粒子 | 多 | 黄赤褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 口縁部 | 無文 | 指頭痕 | 石英・輝粒子 | | 明黄褐色 | 明黄褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 指頭痕 | 石英・輝粒子 | | 黒褐色 | 暗灰褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 指頭痕・横ナデ | 石英・輝粒子 | | 暗黄褐色・黒褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 指頭痕 | 石英・輝粒子 | | 暗黄褐色・黒褐色 | 暗灰褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 指頭痕 | 石英・輝粒子 | | 暗灰褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 横ナデ | 石英 | | 明黄褐色 | 明黄褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文・横ナデ | 指頭痕・横ナデ | 石英・輝粒子 | | 暗黄褐色・黒褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 胴部 | 無文 | 指頭痕 | 石英・輝粒子 | | 黄灰褐色 | 黒褐色 |
| 2号住居址 | 9 | 深鉢 | 底部付近 | 無文・横ナデ | 横ナデ | 石英・輝粒子 | | 暗黄褐色・黒褐色 | 暗灰褐色 |

付表2 石器観察表

| 出土位置 | 図版番号 | 機種 | 石材 | 色調 | 重量(g) | 備考 |
|-------|-------|--------|-------|-------|--------|--------|
| 2号住居址 | 10 1 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 1.99 | |
| 2号住居址 | 10 2 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 1.41 | わずかに欠損 |
| 2号住居址 | 10 3 | 石鏃 | チャート | 灰色 | 1.29 | |
| 2号住居址 | 10 4 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 1.31 | 欠損 |
| 2号住居址 | 10 5 | 石鏃 | チャート | 白灰色 | 1.33 | 欠損 |
| 2号住居址 | 10 6 | 石鏃 | チャート | 白灰色 | 1.52 | 未製品? |
| 2号住居址 | 10 7 | 石鏃未製品 | チャート | 茶色 | 1.43 | |
| 2号住居址 | 10 8 | 石鏃未製品 | チャート | 黒色 | 1.11 | |
| 2号住居址 | 10 9 | 石鏃未製品 | チャート | 茶色 | 1.89 | |
| 2号住居址 | 10 10 | 石鏃未製品 | チャート | 白灰色 | 1.36 | |
| 2号住居址 | 10 11 | 石鏃未製品 | チャート | 茶色 | 2.66 | |
| 2号住居址 | 11 1 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 1.75 | 先端欠損 |
| 2号住居址 | 11 2 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 1.73 | 先端欠損 |
| 2号住居址 | 11 3 | 石鏃 | チャート | 黒色 | 4.58 | 先端欠損 |
| 2号住居址 | 11 4 | 石匙 | 鉄石英 | — | 12.66 | |
| 2号住居址 | 11 5 | 楔? | チャート | 黒色 | 6.54 | |
| 2号住居址 | 11 6 | 剥片 | チャート | 灰色 | 5.09 | 両極打法 |
| 2号住居址 | 11 7 | 残核 | チャート | 黒色 | 9.99 | 両極打法 |
| 2号住居址 | 11 8 | 残核 | チャート | 黒色 | 13.27 | 両極打法 |
| 2号住居址 | 12 1 | 剥片 | チャート | 茶色 | 3.13 | |
| 2号住居址 | 12 2 | 剥片 | チャート | 黒色 | 6.75 | |
| 2号住居址 | 12 3 | 剥片 | チャート | 青灰色 | 3.77 | |
| 2号住居址 | 12 4 | 剥片 | チャート | 黒色 | 8.33 | |
| 2号住居址 | 12 5 | 剥片 | チャート | 黒色 | 9.89 | |
| 2号住居址 | 12 6 | 剥片 | チャート | 黒色 | 2.13 | |
| 2号住居址 | 12 7 | 剥片 | チャート | 黒色 | 2.56 | |
| 2号住居址 | 12 8 | 剥片 | チャート | 黒色 | 0.93 | |
| 2号住居址 | 12 9 | 剥片 | チャート | 黒色 | 2.56 | |
| 2号住居址 | 12 10 | 剥片 | チャート | 黒色 | 4.4 | |
| 2号住居址 | 13 1 | 剥片 | チャート | 黒色 | 10.49 | |
| 2号住居址 | 13 2 | 剥片 | チャート | 黒色 | 21.74 | |
| 2号住居址 | 13 3 | 剥片 | チャート | 黒色 | 14.58 | |
| 2号住居址 | 13 4 | 残核 | チャート | 黒色 | 27.96 | 剥片素材 |
| 2号住居址 | 14 1 | 残核 | チャート | 黒色 | 21.9 | |
| 2号住居址 | 14 2 | 残核 | チャート | 黒色 | 20 | |
| 2号住居址 | 14 3 | 残核(原石) | チャート | 青灰色 | 201.45 | |
| 2号住居址 | 15 1 | 原石(残核) | チャート | 黄茶色 | 1872.9 | |
| 2号住居址 | 15 2 | 原石(残核) | チャート | 赤茶・灰色 | 402.15 | |
| 2号住居址 | 15 3 | 原石(残核) | チャート | 青灰色 | 5760 | |
| 2号住居址 | 16 1 | スクレイパー | 緑色凝灰岩 | — | 57.62 | |
| 2号住居址 | 16 2 | 不明 | 緑色凝灰岩 | — | 245.37 | |
| 2号住居址 | 16 3 | 打製石斧 | 緑色凝灰岩 | — | 308.95 | |
| 2号住居址 | 16 4 | 二時加工剥片 | 緑色凝灰岩 | — | 32.46 | |
| 2号住居址 | 16 5 | スクレイパー | 緑色凝灰岩 | — | 48.34 | |
| 2号住居址 | 17 1 | 石皿 | 緑色安山岩 | — | 5414 | |
| 2号住居址 | 18 1 | 石皿 | 緑色安山岩 | — | 3883.3 | |



木次原遺跡
調査区南側の県道より。



木次原遺跡
遺跡内部から相木の谷をのぞむ。



1号住居址検出前
断面精査前。精査後はP.26参照。



1号住居址北側プラン
断面北側のわずかに残されたプラン。



1号住居址調査途中
床面に板状炭化材が並ぶ。

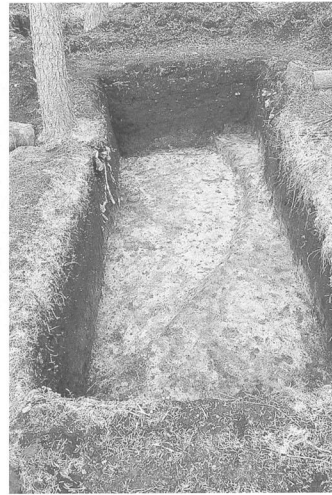


1号住居址床面炭化材
板状炭化材のアップ。

図版 2



1号住居址完掘
床面と東北側の壁が確認出来る。



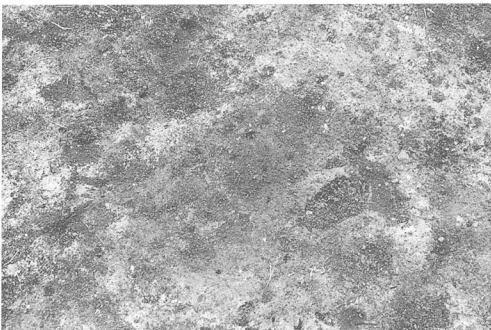
2号住居址調査途中
平成12年。調査区内に立ち上がり
床面が確認出来た。



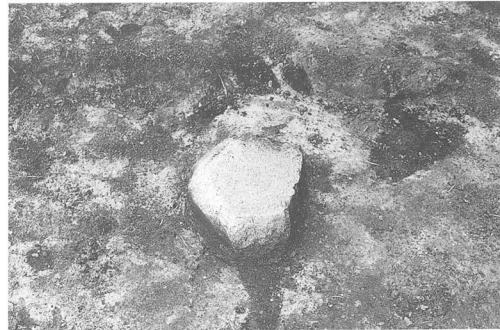
2号住居址調査途中
平成13年。調査区を拡大し、ほぼ全体のプランが確認さ
れた。



2号住居址完掘
床面と不整形のプラン。他の遺構との切り合いは無
かった。



2号住居址炉址
写真中央わずかに土が赤化している。



2号住居址石皿出土状況
石皿（図版17-1）の出土状況。ほぼ床面に接していた。



1号土抗完掘
北側から。



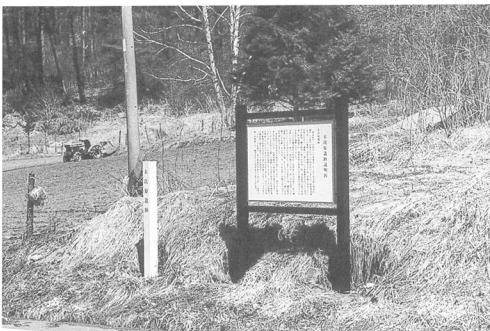
1号土抗完掘
俯瞰。チャート原石が見えるが自然堆積の物と思われる。



発掘風景
5号トレンチ調査状況。



発掘風景
2号住居址調査状況。



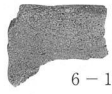
木次原遺跡現地説明板と標柱
1号住居址西の道路側に設置。



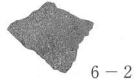
1号住居址断面パネル展示状況
村立施設「長者の森」森林体験交流センター内。

图版 4

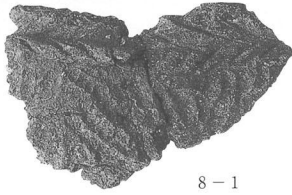
1号住居址出土土器
(1:2)



6-1



6-2



8-1



8-2



8-4



8-3



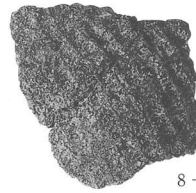
8-5



8-6



8-8



8-9



8-7



8-10



8-11



9-1



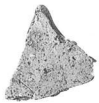
9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-8



9-7



9-9



9-10



9-11

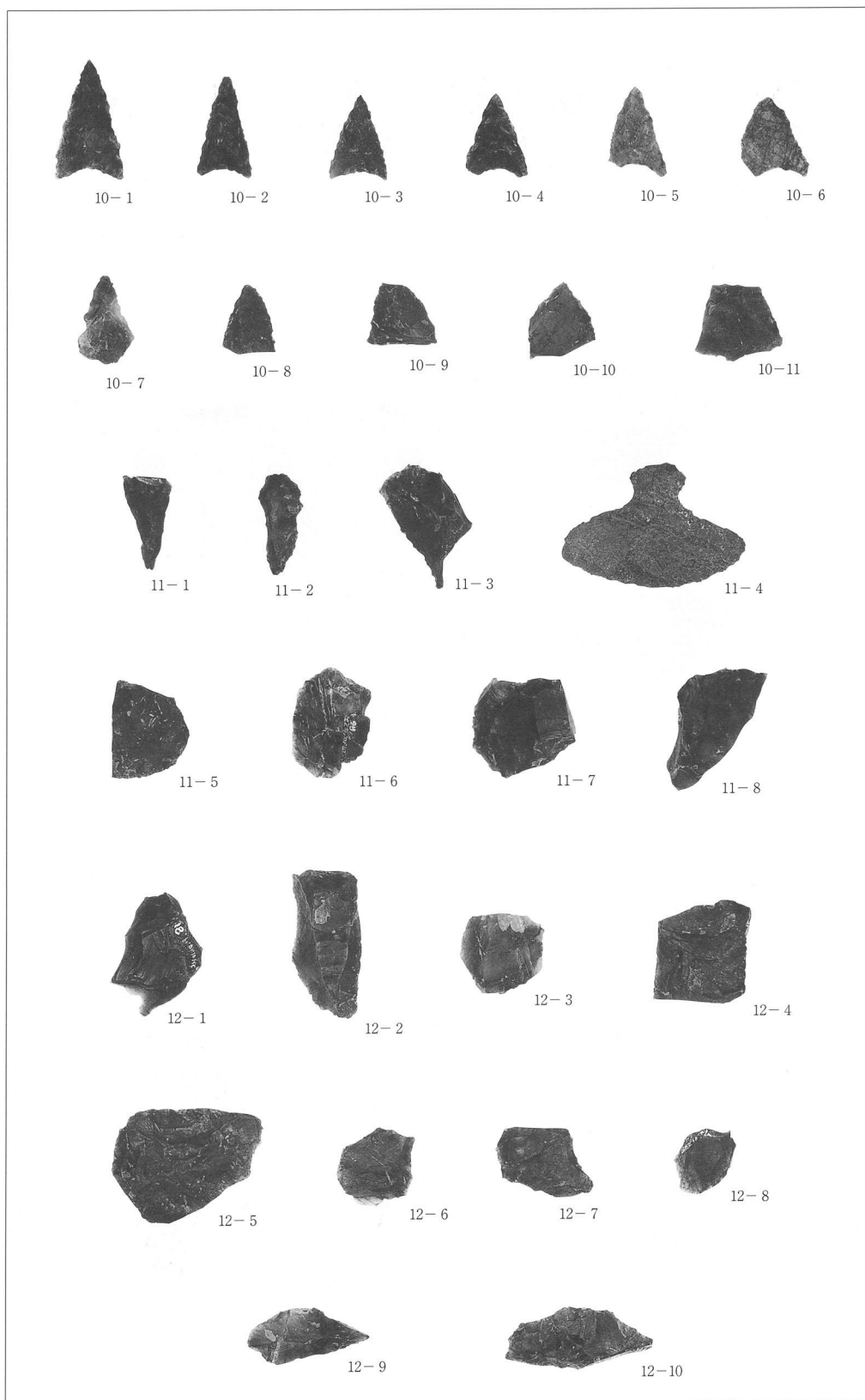


9-12

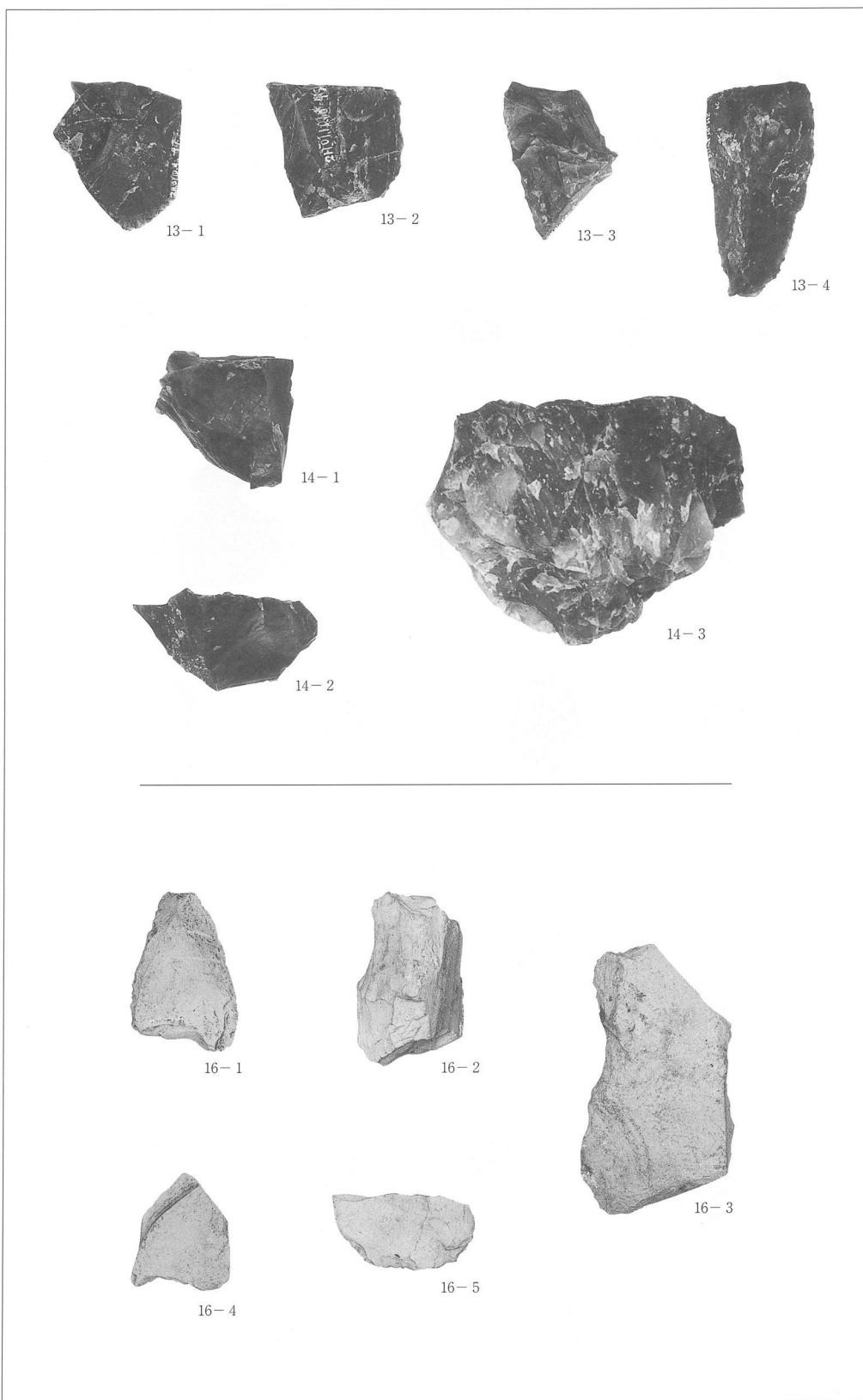


9-13

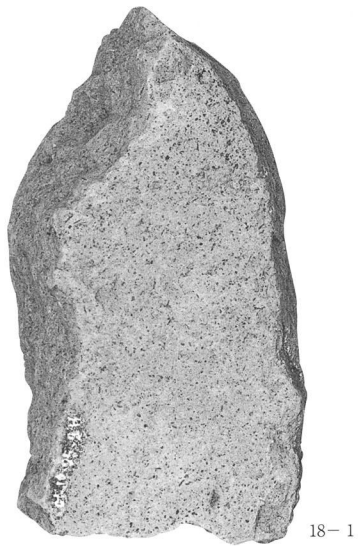
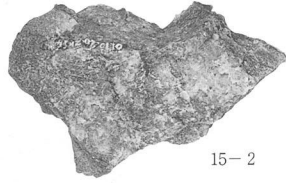
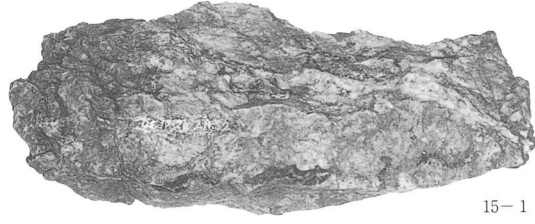
2号住居址出土土器 (1:2)



2号住居址出土石器(2:3)



2号住居址出土石器 (上段 2 : 3、下段 1 : 3)



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|-------------------|--|---------------------------|---|-----------------------|--|---------------------------|------------------|------|
| ふりがな | きつぎはらいせき | | | | | | | |
| 書名 | 木次原遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 藤森英二 | | | | | | | |
| 編集機関 | 北相木村教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒384-1201 長野県南佐久郡北相木村2744 TEL0267-77-2111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2003 (平成15年) 3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| きつぎはらいせき 木次原遺跡 | ながのけんみなみさくぐん 長野県南佐久郡 きたあいきむら 北相木村 | 20307 | | 36度 03分 56秒 | 138度 37分 40秒 | 19980424) 20011026 | 20m ² | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 木次原遺跡 | 集落址 | 縄文時代 前期 奈良・平安時代 | 縄文時代 竪穴住居址 1 土坑 1 奈良・平安時代 竪穴住居址 1 | 縄文土器 石器 土師器 | 縄文時代前期の石器 製作跡を検出。古代 では住居址から炭化 材が出土。年代分析 および樹種の特定制 を行った。また住居址 の断面剥ぎ取りを行 い、展示可能とした。 | | | |

木次原遺跡

平成15年3月31日 発行

編集 北相木村教育委員会
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ (0267) 77-2111(代)

印刷 ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎ (026) 244-0235(代)